

(6) L5地区

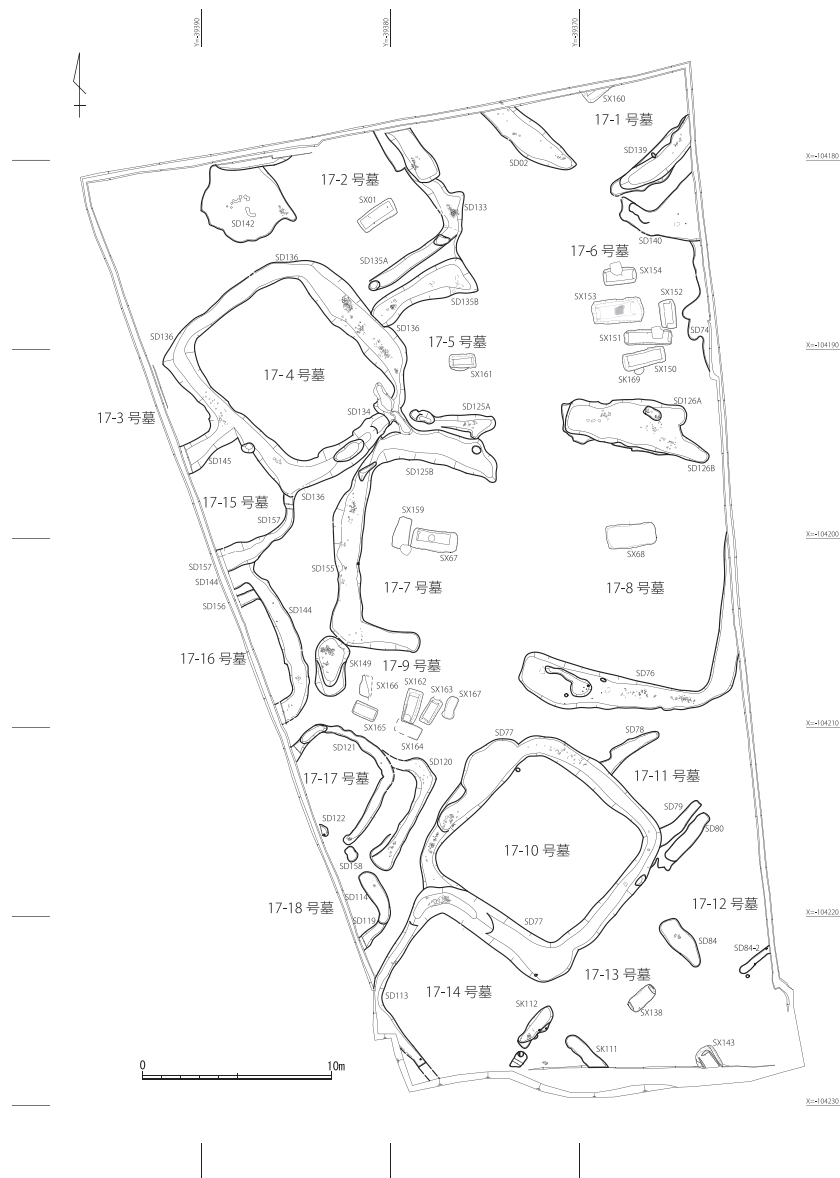
L5地区は、今回の調査区では最も北西に設定した調査区である。この地区では、上層で奈良時代を中心とする掘立柱建物跡群を、下層では方形周溝墓群を検出した。以下、弥生・古墳時代の遺構・遺物と、飛鳥時代以降の遺構・遺物の2時期に大別して概観する。

1) 弥生・古墳時代の遺構・遺物

A. 検出遺構

L5地区では総数18基の方形周溝墓を検出した。以下、各周溝墓について概観する。

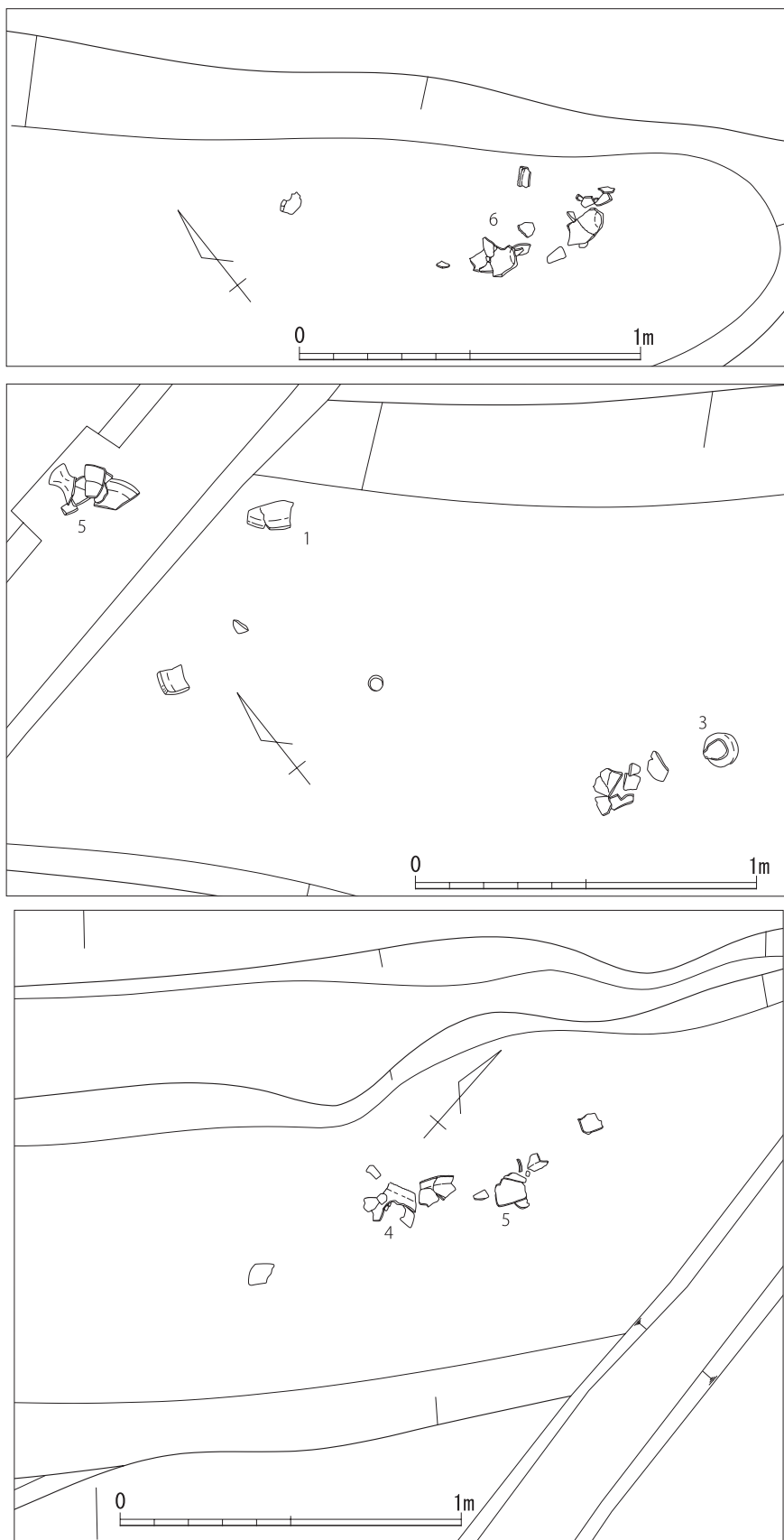
17-1号墓 調査区の北東部で検出したS D02(幅1.6m・深さ0.8m)を西側区画溝、S D139を東側区画溝とする方形周溝墓である。大部分が調査区外であり、全容は不明である。周溝は南西隅が途切れており、完周しない。また近接する周溝墓と周溝を共有しない点も特徴的である。盛土は確認できなかった。



第165図 L5地区検出遺構配置図(弥生・古墳時代、1/400)



第166图 L 5 地区方形周溝墓平面图(1/200)

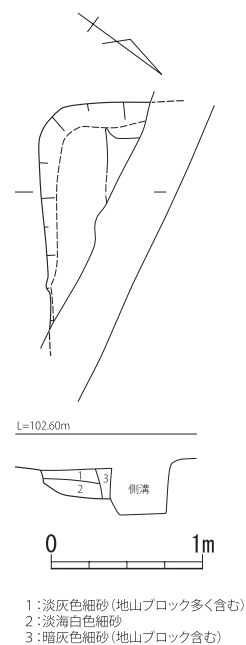


第167図 SD02・SD139遺物出土状況図(1/20)

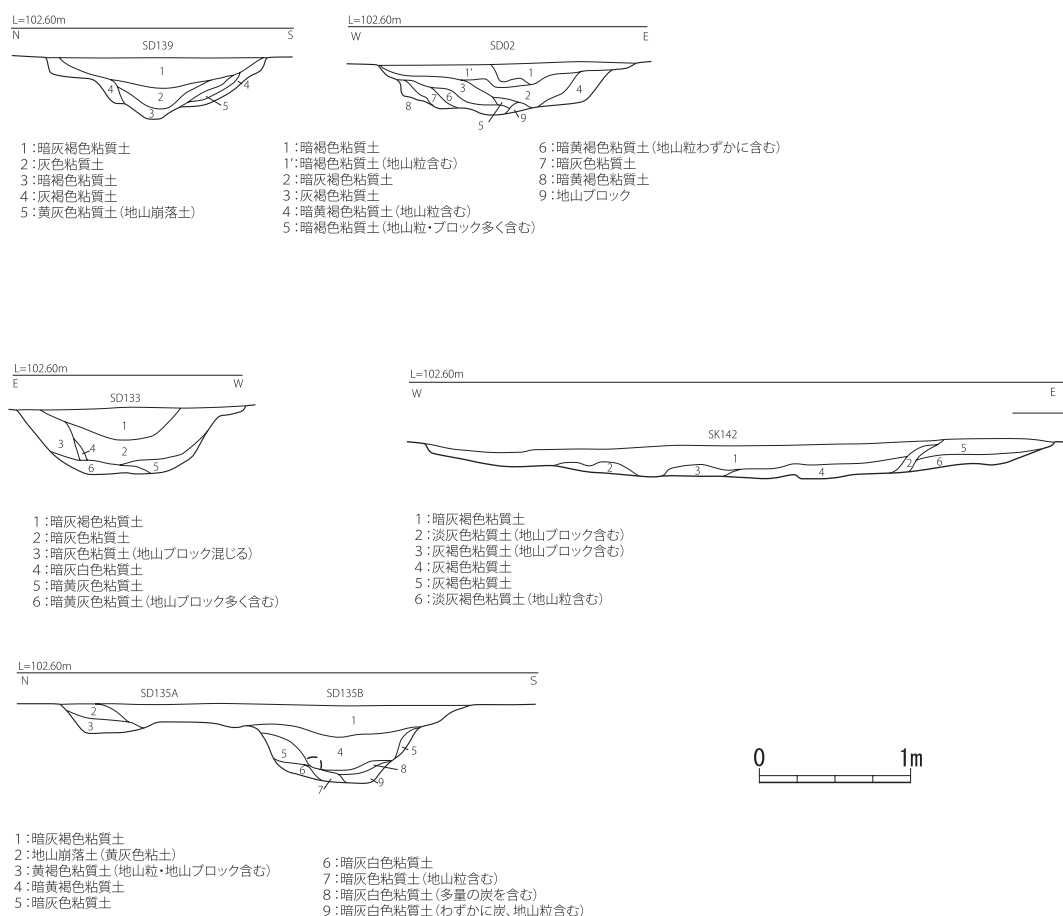
S D02では高杯(第196図1)・脚(第196図2・3)などが検出された(第167図)。脚(3)は周溝墓側からの転落の可能性が高い。また、埋土中から磨製石斧(第202図52)が出土している。S D139でも、甕(第196図4・5)が墳丘側から転落した状態で検出された(第167図下)。

この周溝墓に伴う埋葬施設として、木棺墓S X160(第168図)を検出した。大部分が調査区外のため、詳細は不明である。検出部分で、墓壙は平面長方形プランを呈し、断面は素掘りの形状をとる。主軸は東西方向にとる。墓壙の規模は長軸1.5m以上、幅1m以上、深さ0.2mを測る。棺は組合式の箱型木棺の痕跡を検出した。木棺は長側板が小口板を挟み込む形態を示す。小口板は下に突出しない。検出部分で幅0.2m、長さ0.45mを測る。副葬品は認められない。

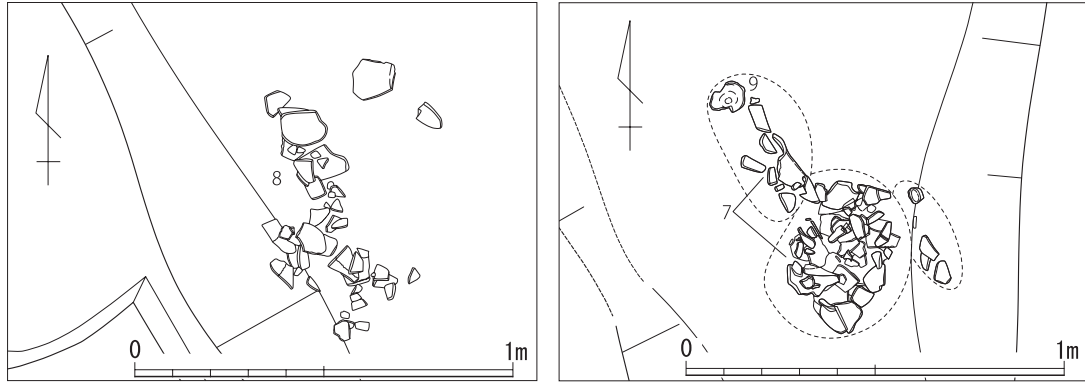
17-2号墓 17-1号墓の西に位置する。S D133(幅1.3m・深さ0.5m)を東側区画溝に、S D135A(幅0.7m・深さ0.2m)を南側区画溝、S D142(西：幅4.2m・深さ0.25m、北：幅0.6m以上・深さ0.35m以上)を西および北の区画溝とする方形周溝墓である。また、西側に位置する17-4号



第168図 木棺墓S X160実測図(1/50)



第179図 17-1・2号墓周溝断面(1/50)



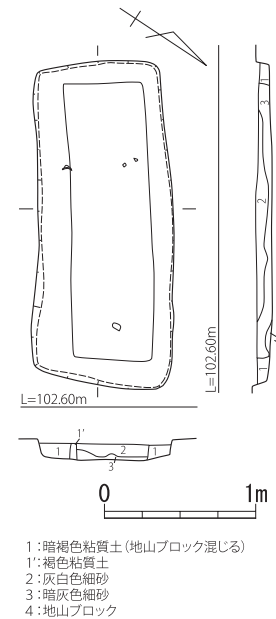
第170図 S D133遺物出土状況図(1/20)

墓のS D136と一部周溝を共有し、西側の区画溝としている。S D133とS D135Aは連続し、S D135AとS D136の間は深さを減じて、17-2号墓の墳丘斜面と連続して終わる。S D133は平面的に北側が一部再掘削されたように深くなっているが、断面の観察からは再掘削を行った確証を得ることはできなかった。南側区画S D135Aは南に位置する17-5号墓の北側区画S D135Bと同一面で検出し、掘形を共有するが、底面付近で2条の溝に分かれている。また、断面観察からは17-4・5号墓との前後関係をうかがうことはできなかった。北西の区画S D142は南側が浅い土坑状を呈し、北西の屈曲部から深さを増しているが、北側は調査区外のため、詳細を明らかにすることはできなかった。以上のように周溝は完周せず、西側中央部が途切れた形態を示している。周溝墓の規模は南北8.3m以上、東西8mを測る。

周溝内からの遺物としては、S D133の北側で墳丘側から転落した状態で、甕(第196図8)などが破片化した状態で検出された(第170図)。また、S D133の南側では墳丘外から転落したような状態で甕(7)、壺底部(9)などが検出された。また、17-4号墓の項で後述するが、S D136で出土した遺物の中にはこの周溝墓側からの転落と思われる弥生土器が存在する。

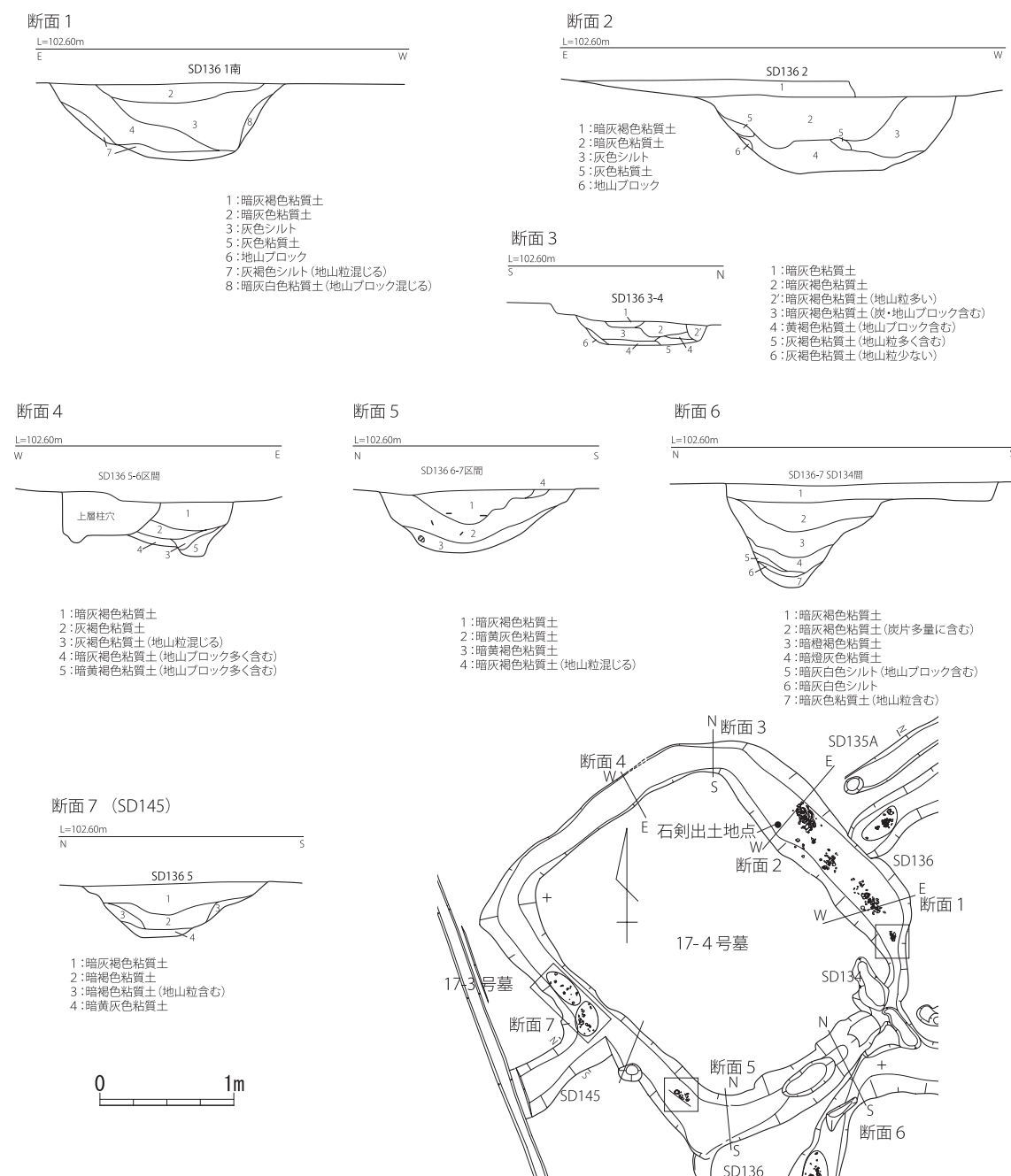
周溝墓の埋葬施設として、木棺墓S X01を検出した(第171図)。主軸を東西方向にとる。この軸は墳丘の軸とはほぼ一致する。墓壙の平面形は長方形プランを呈し、規模は長軸2.15m、短軸0.9m、深さ0.2mを測る。墓壙の断面形態は素掘りである。棺は箱型木棺の痕跡を検出した。小口の組み方など詳細は明らかにできなかった。規模は長軸1.8m、短軸0.54mを測る。墓壙埋土中から細片化した弥生土器が検出されたが、この埋葬施設に伴うものか判断できなかった。

17-3号墓 17-4号墓の西側区画S D136を東側区画溝として共有し、この溝の中央から西へ分岐して延びるS D145(幅1.1m、深さ0.4m)を南側区画溝にもつ方形周溝墓として想定した。大部分が調査区外のため詳細は不明である。なお、17-4号墓の周溝北西隅が深く掘り込まれており、この周溝墓の盛土確保のため再掘削された可能性が考えられる。



第171図 木棺墓S X01
実測図(1/50)

17-4号墓 完周するSD136(北:幅1.1m・深さ0.4m、西:幅1m・深さ0.4m、南:幅1.3m・深さ0.4~1m、東:幅2.1m・深さ0.6m)により区画される方形周溝墓である。なお、調査中、他の周溝と接する部分には便宜上別の遺構番号(SD134)を与えて遺物の混乱を避けたが、報告ではSD136とする。周溝の北西部は他の部分より周溝が深く掘削されており、隣接する17-3号墓の盛土確保のため、再掘削された可能性が高いものと判断された。また、南側周溝の中央も一段深く掘り込まれているが、溝内埋葬などの可能性は考えられず、この周溝墓の盛土確保のため掘削された痕跡と思われる。また、周溝南西隅で、17-15号墓の南側区画SD157が分岐するが、前後関係をうかがうことはできなかった。周溝墓の規模は東西8m、南北10mを測る。また、埋



第172図 SD136断面図(1/50)



第173図 SD136遺物出土状況図(1/20)

葬施設は確認されなかった。

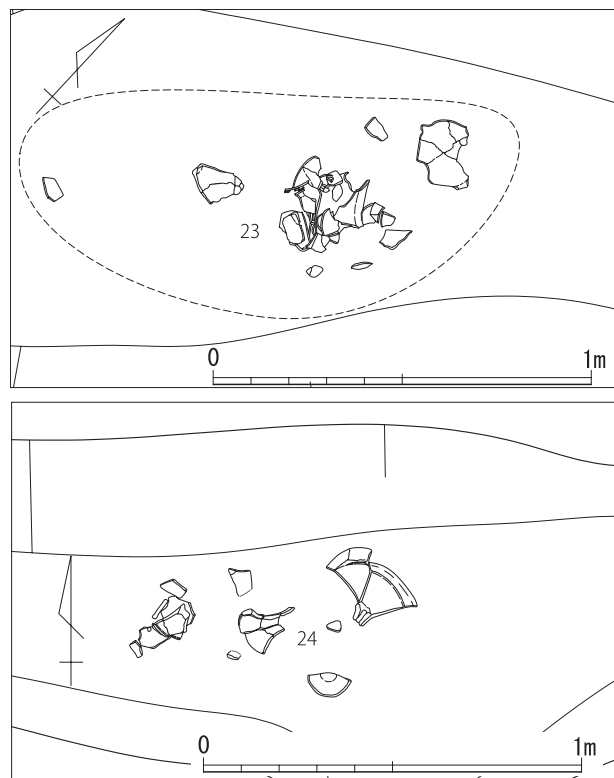
遺物は周溝の各所から検出されている。特に西側周溝では弥生土器がまとまって出土している。これらの遺物は第172図断面1・2に示す第4層内もしくは第4層上から検出された。そのためこれらの遺物は周溝が一定埋没してからの転落などによるものとみられる。とくに北側の壺(第196図10)は17-5号墓側から転落したものとみられる。また、この地点では土層観察用畦除去中に完形の磨製石剣(第202図57)が断面2の第3層内から出土している。この磨製石剣は17-4号墓側からの転落、もしくは周溝墓の盛土流失などに伴って、周溝内に埋没したものと判断される。また、S D145付近での遺物の出土状況(第173図)は17-3号墓側からの転落の様相を示している。

17-5号墓 17-4号墓の東に隣接する。西側は17-4号墓のS D136と共有し、北側をS D135B(幅1.8m・深さ0.5m)で、南側をS D125A(幅0.6m・深さ0.4m)により区画する方形周溝墓である。東側に区画溝は検出されなかったが、埋葬施設が遺存していることから大きく削平されているとは考えがたく、当初から区画溝が存在しなかった可能性が高いものとする。周溝墓の規模は南北7.5m、東西5mを測るが、南北両周溝は東に向かって「ハ」字状に開いているため、平面プランはややいびつな台形となる。南に位置する17-7号墓との前後関係は明らかではない。

周溝内からは弥生土器が出土している。北側のS D135B西側溝中央部では壺(第198図23)が破片となって出土している(第174図上段)。すぐ北に17-2号墓の南周溝S D135Aが存在することから、17-5号墓側からの転落によるものと判断する。

南側のS D125Aでは周溝東側で高杯(24)1個体分を検出した(第174図下段)。周溝床面より遊離していることから周溝が一定程度埋没してから、17-5号墓側から転落、あるいは遺棄されたものとする。

墳丘のほぼ中央部で東西に主軸をとる埋葬施設木棺墓S X161(第175図)を検出した。墓壙は平面長方形プランを呈し、規模は長軸1.4m、短軸0.7m、深さ0.4mを測る。墓壙の断面形態は素掘りである。棺は箱型木棺の棺痕跡を確認した。棺材の痕跡そのものは確認できなかったが、小口裏込め土と長側板裏込め土との差異から長側板が小口板を挟み込む形態の組合式箱型木棺と判断された。規模は内法で長軸0.95m、短軸0.35mを測る。東側の棺幅が若干広がっていることから被葬者は東頭位と推定される。棺内、墓壙埋土中から遺物は検出されなかった。



第174図 S D135B・125A 遺物出土状況図
(上段：S D135B、下段125A、1/20)

17-6号墓 17-5号墓の東に位置する。北側を不整形なSD140(幅1.2~3.6m・深さ0.15m)、東側をSD74(幅1m以上・深さ0.2m以上)で南側をSD126A(幅1m以上・深さ0.5m)で区画する方形周溝墓である。西側には区画溝は検出されなかったが17-5号墓同様、埋葬施設が遺存していることから大きく削平されているとは考えがたく、当初から存在しなかったものと判断する。おそらく、低墳丘の盛土により墓域を確保し、視覚的に区画していたものと考えられる。周溝のうち、SD126Aは平面的にはSD126Bと切り合い関係をもつように見えるが、断面観察からは同時期の埋没と判断され、前後関係を示すものではない。おそらく短期間のうちに先行する溝を拡張する形で掘削し、盛土を確保したものと考えられる。周溝墓造墓の際には意識的に個別の溝として新たに掘削作業を行ったものとする。また、溝底部東側で土坑状に一段掘り込まれた部分を検出した。溝内埋葬施設の可能性を考慮しながら調査を実施したが、埋土の状況からその可能性はないものと判断した。周溝墓の規模は東西8m、南北10mを測る。

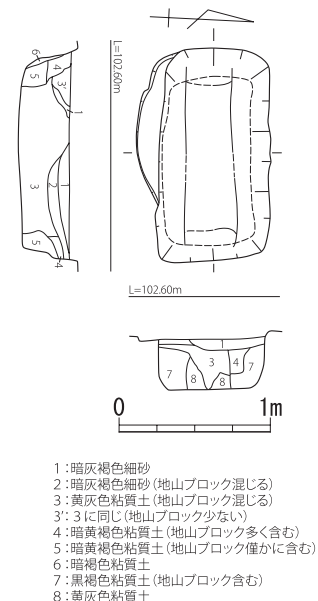
SD126Aの底面近くから細片化した壺をはじめとする弥生土器を検出した(第177図)。この周溝墓からの転落とみられるが、劣化が著しく取り上げることのできない個体も存在した。そのため図示しうる資料に恵まれなかった。また、土器とともに砥石(第202図59)が出土している点は周溝墓の遺物として注目される。

この周溝墓では5基の埋葬施設を確認した。以下、各遺構について概観する。

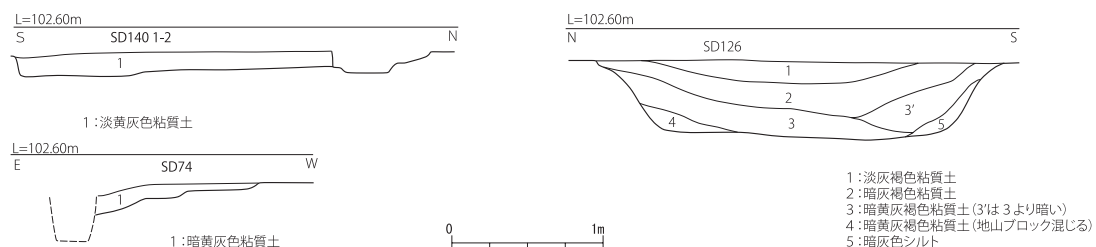
木棺墓S X 150(第178図) この周溝墓の埋葬施設のうち最も南に位置する東西方向に主軸をとる木棺直葬墓である。墓壙の平面形は長方形プランを呈し、規模は長軸2.3m、短軸0.9m、深さ0.17mを測る。墓壙の断面形態は素掘りである。木棺は棺材そのものの痕跡は確認されなかったが、小口部分と、長側板部分の裏込め土との差異を確認した。棺の型式は長側板が小口板を挟み込む形態の組合式箱型木棺と判断された。小口板は下に突出することはない。木棺の規模は内法で長軸1.8m、短軸0.55mを測る。

小口側棺内の流入土中から石庖丁(第202図56)の破片が出土しているが、小破片であり、供献などに伴うものではないものとする。

木棺墓S X 151(第178図) 木棺墓S X 150の北に近接する木棺



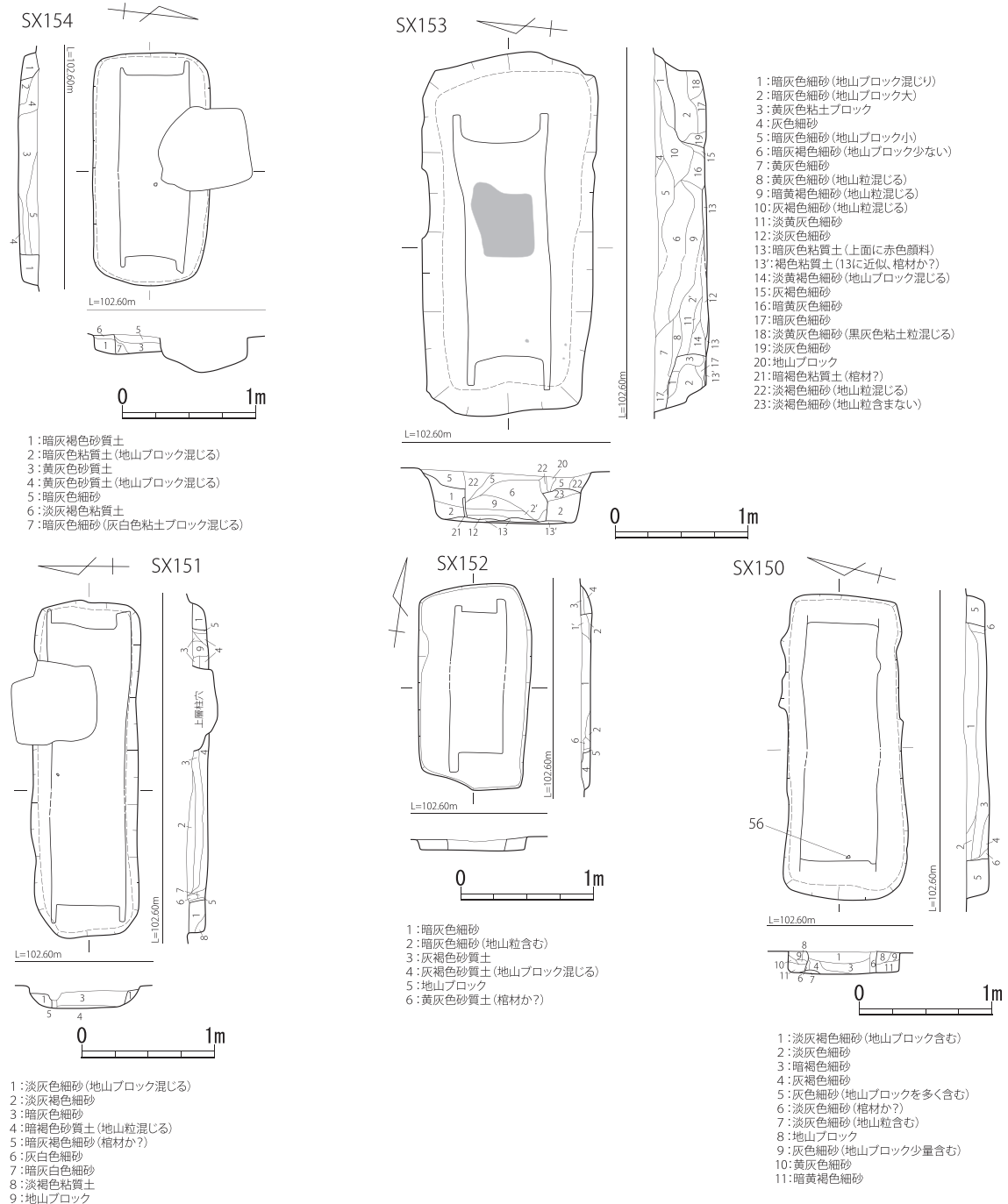
第175図 木棺墓S X 161実測図(1/50)



第176図 17-6号墓周溝断面(1/50)



第177図 S D126遺物出土状況図(1/20)



第178図 17-6号墓埋葬施設実測図(1/50)

直葬墓である。主軸はほぼ東西方向にとる。墓壙の平面形は長方形プランを呈し、規模は長軸2.52m、短軸0.8m、深さ0.18mを測る。墓壙の断面形態は素掘りである。木棺は棺材そのものの痕跡を確認できず、裏込め土と棺の腐食痕・棺内流入土の差として認識された。棺の型式は長側板が小口板を挟み込む形態の組合式箱型木棺と判断された。小口板は下に突出することはない。木棺の規模は長軸2.1m、短軸0.55mを測る。

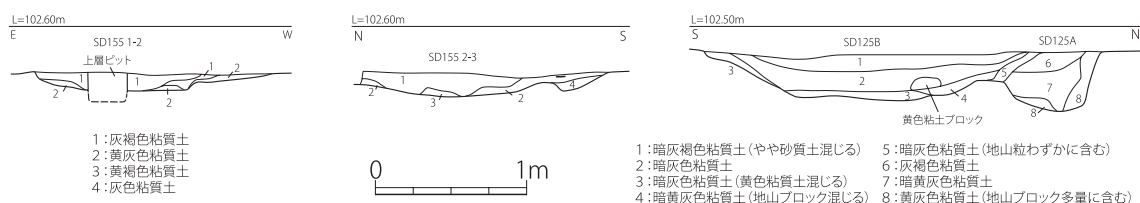
木棺墓 S X 152 (第178図) S X 151の北東に近接して検出された木棺直葬墓である。この周溝墓の埋葬施設で唯一南北方向に主軸をとる。墓壙の平面形は長方形プランを呈し、規模は長軸

1.5m、短軸0.8m、深さ0.1mを測る。墓壙の断面形態は素掘りである。木棺は棺材そのものの痕跡を確認できず、裏込め土と棺の腐食痕・棺内流入土の差として認識された。棺の型式は長側板が小口板を挟み込む形態の組合式箱型木棺と判断された。南東長側板が南に突出する状況は確認することができなかった。小口板は下に突出することはない。木棺の規模は長軸1.05m、短軸0.4mを測る。小型の木棺直葬墓である。

木棺墓 S X 153(第178図) S X 151の北、この周溝墓のほぼ中心に位置する木棺直葬墓である。主軸は南北方向にとる。墓壙の平面形は長方形プランを呈し、規模は長軸2.68m、短軸1.27m、深さ0.4mを測る。遺存状況は良好である。墓壙の断面形態は素掘りである。木棺は棺材そのものの痕跡を確認できず、裏込め土と棺の腐食痕・棺内流入土の差として認識された。棺の型式は長側板が小口板を挟み込む形態の組合式箱型木棺と判断された。小口板は下に突出することはない。また土層断面の観察結果から底板を有し、底板の上に長側板、小口板がのる形態の棺と判断される。棺内、棺外からは水銀朱と思われる赤色顔料が棺底よりわずかに遊離した状態で検出された。被葬者の胸部周辺に散布されたものとみられる。また、顔料は棺外の底板と思われる土層の上からも検出されており、棺材を組み合わせた段階で被葬者の安置、顔料の散布がなされた可能性が高い。木棺の規模は長軸1.6m、短軸0.6mを測る。東側の幅がやや広く、被葬者は東頭位で埋葬されたものとみられる。

木棺墓 S X 154(第178図) S X 153の北に位置する東西方向に主軸をとる木棺直葬墓である。墓壙の平面形は長方形プランを呈し、規模は長軸1.75m、短軸0.9m、深さ0.15mを測る。墓壙の断面形態は素掘りである。木棺は棺材そのものの痕跡を確認できず、裏込め土と棺の腐食痕・棺内流入土の差として認識された。棺の型式は長側板が小口板を挟み込む形態の組合式箱型木棺と判断された。小口板は下に突出することはない。木棺の規模は長軸1.3m、短軸0.53mを測る。棺の幅は西側の方がわずかに広く、被葬者は西頭位と思われる。棺内流入土から弥生土器小片が出土したが、この埋葬施設に伴うものか判断できない。

17-7号墓 「コ」字状に巡る溝、S D 125 B (幅1.6m、深さ0.3m)、S D 155 (西：幅0.4m、深さ0.3m、南：幅1.2m、深さ0.2m)により区画される方形周溝墓である。東側に区画溝は検出されていないが、埋葬施設が遺存しており大きく削平を受けているとは考えられず、東側区画溝は当初から存在しないものとする。周溝墓の規模は東西7.4m、南北10.6mを測る。17-5号墓との前後関係については土層から見限り、第179図5層がS D 125 Bの掘形と一致しないため、一見切り合いがあるようにみえるものの、埋没時期の差として認識する。盛土は確認されなかった。



第179図 17-7号墓周溝断面(1/50)

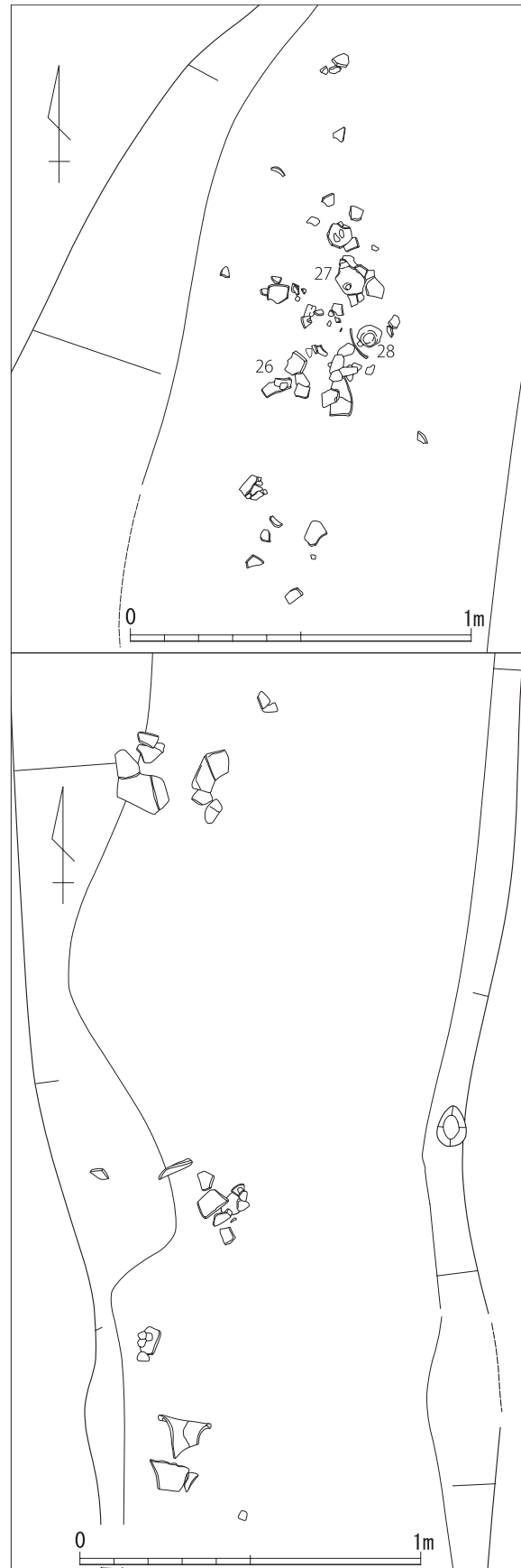
西側区画溝SD155から破片化した弥生土器が検出された。北側の一群(第180図上段)は溝のほぼ中央で細片化した壺類を中心とした弥生土器が検出された。また、溝の中央部でも細片化した壺が確認されたが(第180図下段)、周溝外からの転落もしくは遺棄の可能性が高いものと考えられる。周溝の南西隅でも細片化した弥生土器が検出されているが、体部の小片のみである。

また、溝125Bの東端で太型蛤刃石斧(第202図53)の基部が出土している。

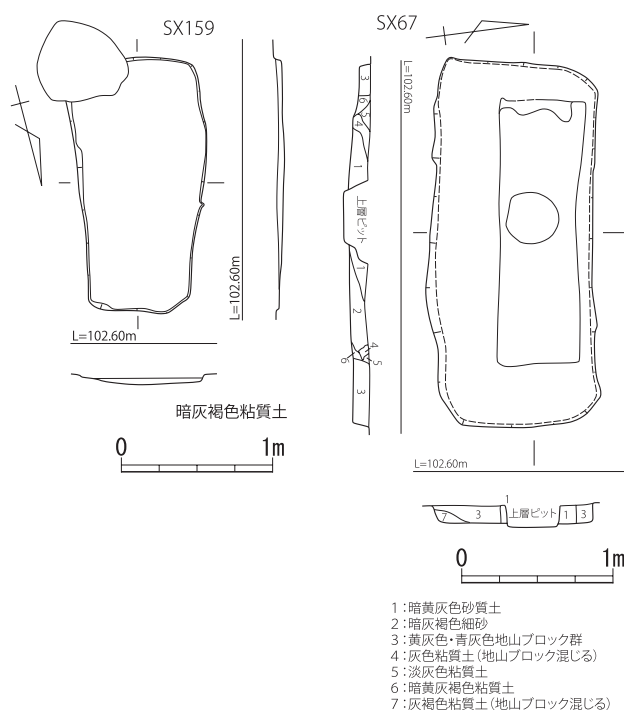
この周溝墓では墳丘中央から2基の埋葬施設を検出した。以下、各遺構について概観する。

埋葬施設SX159(第181図) 墳丘中央よりやや西寄りで検出された埋葬施設である。墓壙の平面形は南側の幅が広い長方形を呈する。規模は長軸1.6m、南側幅0.88m、北側幅0.68mを測る。墓壙の断面形は素掘りであり、深さ0.07mと遺存状況はきわめて悪い。そのため、この埋葬施設では棺の痕跡を断面、平面からも確認することができなかった。しかし、墓壙の形態・規模からは南頭位の木棺が納められていた可能性が高いものとする。

木棺墓SX67(第181図) SX159の東、墳丘のほぼ中央に位置する東西方向に主軸をとる木棺直葬墓である。墓壙の平面形は長方形プランを呈し、規模は長軸2.3m、短軸1.1m、深さ0.16mを測る。墓壙の断面形態は素掘りである。木棺は棺材そのものの痕跡を確認できず、裏込め土と棺の腐食痕・棺内流入土の差として認識された。棺の型式は箱型木棺であるが、西側小口では長側板が小口板を挟み込む状況が確認できたが、東側では長側板が突出する状況は確認できなかった。小口板は棺底より下には突出しない。木棺の規模は長軸1.6m、短軸0.5mを



第180図 SD155遺物出土状況図(1/20)

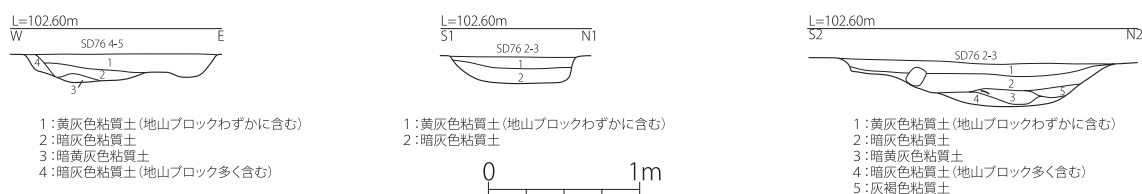


第181図 17-7号墓埋葬施設実測図(1/50)

は確認されなかった。

S D126B埋土上層中から細片化した弥生土器が検出された(第177図)。また、S D76では上層から細片化した弥生土器が検出された(第184図)。壺類(第199図29～31)が中心であるが、いずれも底面より遊離しており、周溝が一定埋没したのちに入った遺物と考えられる。溝底面付近では細片化した弥生土器とともに石庖丁(第202図55)、石斧(第202図54)などが出土したが、正確な図化作業を実施する前に台風による被害で検出位置から移動してしまい、出土地点のみの記録に留めざるを得なかった。

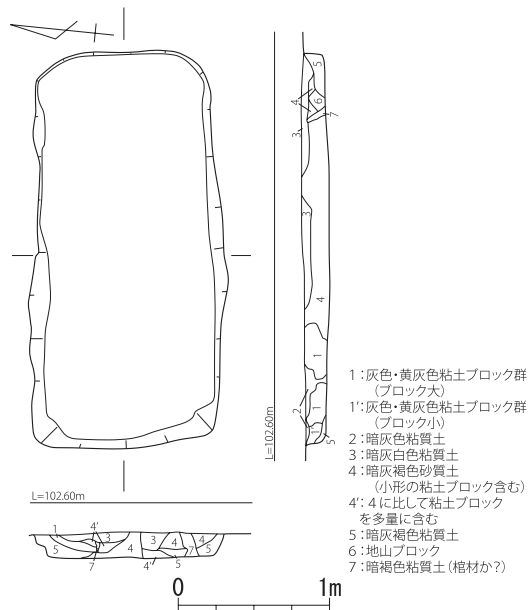
墳丘の中央部では東西方向に主軸をとる木棺直葬墓S X68(第183図)を検出した。墓壙の平面形は長方形を呈し、規模は長軸2.6m、短軸1.27m、深さ0.18mを測る。墓壙の断面形態は素掘りである。棺の痕跡は平面的には確認することができなかった。しかしながら、断面の中には、棺材の置換した土層とみられる部分が複数存在したため木棺直葬墓であることは間違いのないと考える。おそらく、蓋材が腐朽して棺内に流入土が堆積するより先に、側板や小口板が崩壊したものと考える。また、墓壙の幅は西側がわずかながら広くなっており、被葬者は西に頭位をもつ可能性がある。遺物は検出されなかった。



第182図 S D76断面図(1/50)

測る。遺物は検出されなかった。

17-8号墓 17-7号墓の東に位置する。S D126B(幅1.4m以上、深さ0.5m)を北側区画溝に、「L」字状に屈曲するS D76(南:幅1.8m・深さ0.3m、東:幅1.3m・深さ0.2m)を南および東の区画溝とする方形周溝墓である。西側には区画溝が検出されなかったが、埋葬施設が遺存しており、大きく削平を受けているとは考えられず、当初から存在しなかったものとする。また、S D126BとS D76は連続しておらず、北東隅が途切れる形態をとる。周溝墓の規模は東西10m、南北13.6mを測り、今回検出した周溝墓の中では最も広い占有面積をもつ。盛土

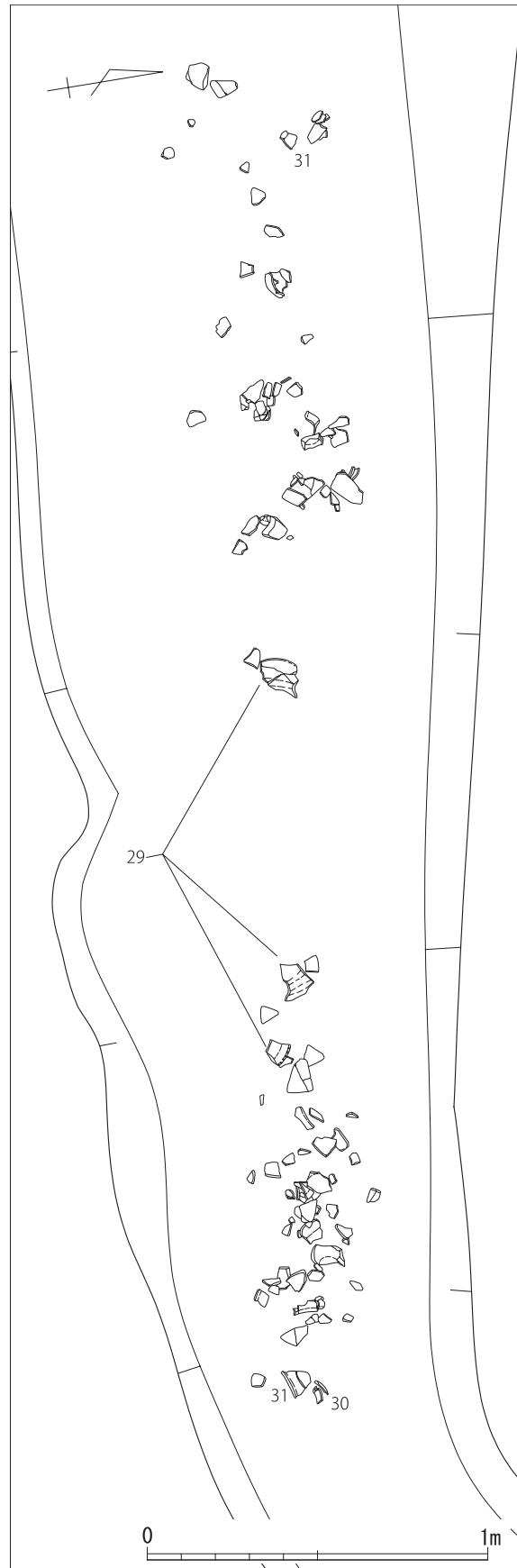


第183図 木棺墓 S X68実測図(1/50)

17-9号墓 17-8号墓の南西に位置する墳墓である。西側にはS K149があり、一定の墳墓としての領域は意図していると考えられるが、北は17-7号墓、南は17-17号墓の周溝を利用し、その間の空間を利用した、明確な区画をもたない木棺墓の集合体のような様相を呈する。なお、この墳墓の上面は上層の遺構であるS D03により大きく削平を受けているが、埋葬施設が遺存していることから、その他の区画溝については当初から存在しなかったと考える。

S K149 (第185図) は長軸3.2m、短軸1.5m、深さ0.2mを測る不整な長楕円形を呈している。壺(第199図34~37)、高杯(第199図38)が破片となって検出された。いずれも第185図2層内から土坑底面に近接して検出されており、土坑に一括して投棄されたものと考えられる。また、第2層には炭や焼土が混入しており、葬送儀礼の際に火を使った行為があったことを予想させる。

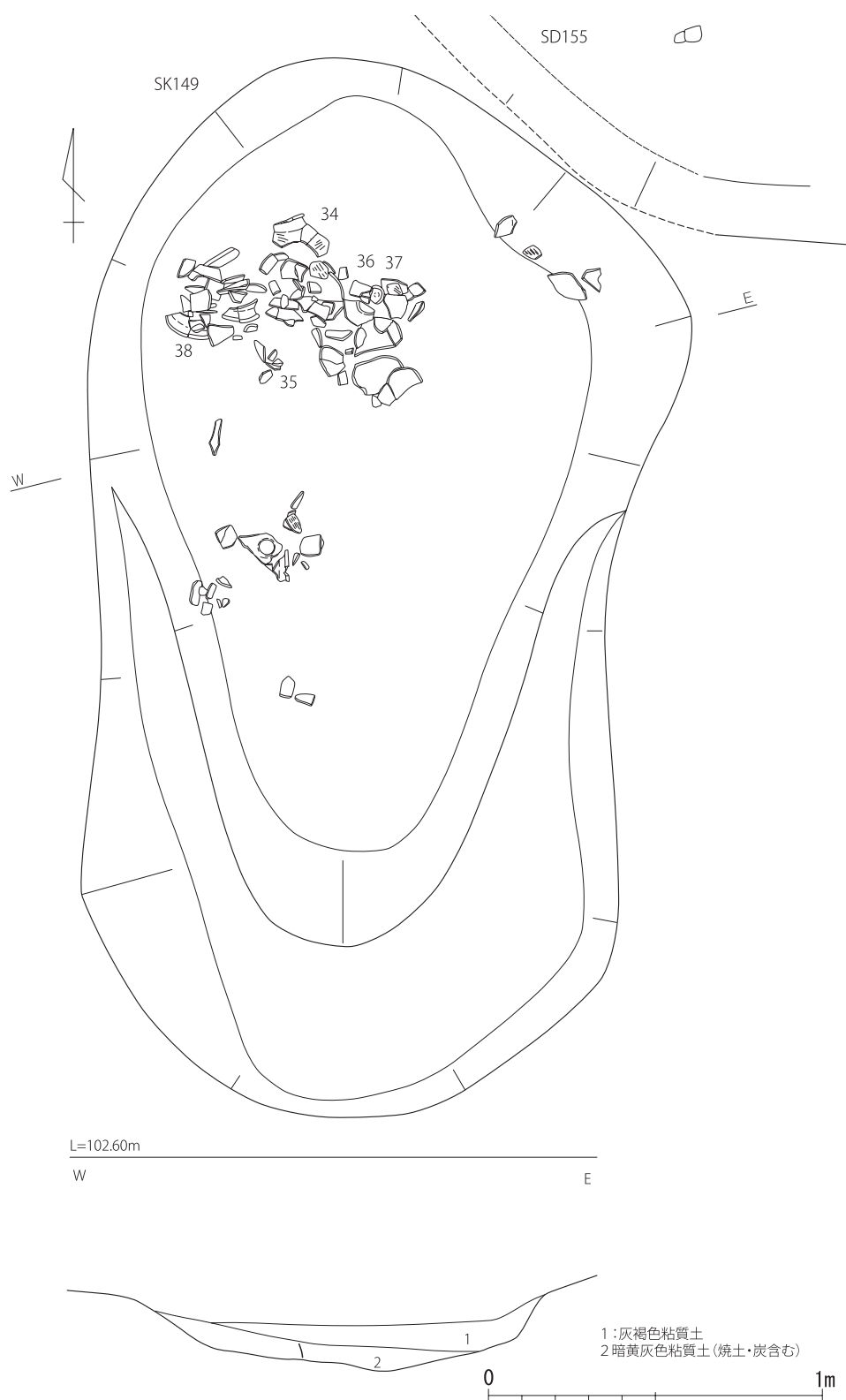
17-9号墓では6基の埋葬施設を検出し



第184図 S D76遺物出土状況図(1/20)

た。以下、各遺構の概要を記す。

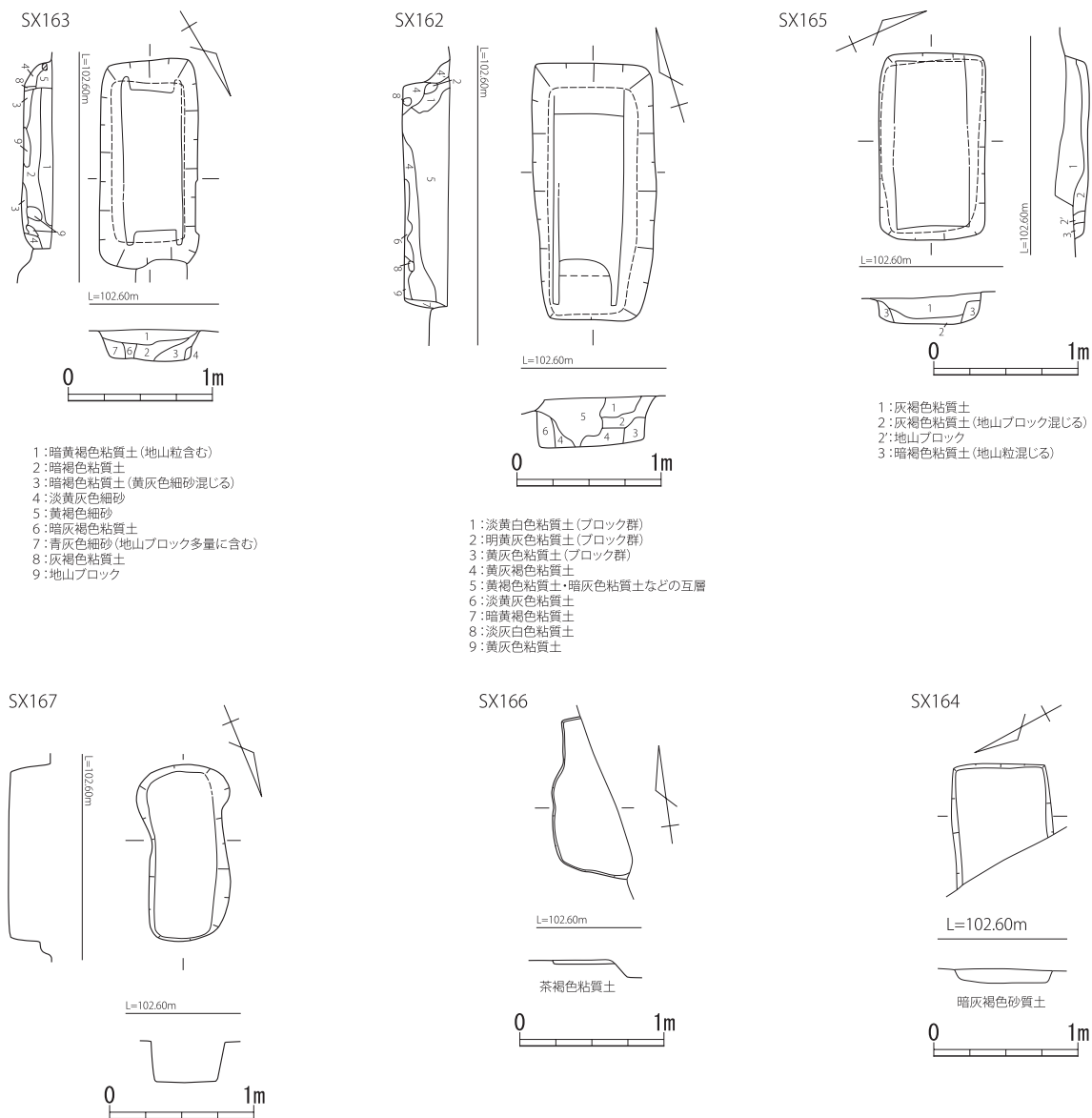
木棺墓 S X 162 (第186図) この墳墓の中心に位置する木棺直葬墓である。主軸は南北方向に



第185図 S K 149実測図(1/20)

とる。S D03、埋葬施設S X164に切られている。墓壇の平面形は長方形を呈し、規模は長軸1.77m、短軸0.85m、深さ0.33mを測る。墓壇の断面形は素掘りである。木棺は組合式箱型木棺であることを確認した。棺材は長側板が小口板を挟み込む形態であり、小口板は下方に突出しない。南小口板は土圧による崩壊が早かったためか棺の内側に湾曲した状態で確認された。本来の小口板は東側長側板との接点にあるものとする。棺の規模は長軸1.1m、短軸0.48mを測り、北側の方がやや幅が広いことから、被葬者は北に頭位を置くものとする。遺物は検出されなかった。

木棺墓S X163（第186図） S X162の東に位置する南北に主軸をもつ木棺直葬墓である。墓壇の平面形は長方形を呈し、規模は長軸1.45m、短軸0.66m、深さ0.2mを測る。墓壇の断面形は素掘りである。木棺は長側板が小口板を挟み込む形態をとる組合式箱型木棺であることを確認した。棺の規模は長軸0.96m、短軸0.4mを測る。遺物は検出されなかった。



第186図 17-9号墓埋葬施設実測図(1/50)

埋葬施設 S X 164 (第186図) 木棺墓 S X 162の南に位置し、墓壙南辺を切る東西方向に主軸をとる埋葬施設である。S D03により大きく削平を受けている。墓壙の平面形は長方形を呈し、規模は長軸0.9m以上、幅0.7mを測る。遺存状況は悪く、棺の痕跡を確認することはできなかったが、位置や形状、埋土の状況から弥生時代の遺構と判断した。遺物は検出されなかった。

木棺墓 S X 165 (第186図) 埋葬施設 S X 164の西で主軸を揃えるように検出された木棺直葬墓である。S D03に切られている。墓壙の平面形は長方形を呈し、規模は長軸1.32m、短軸0.73m、深さ0.2mを測る。墓壙の断面形は素掘りである。棺は箱型木棺であることを確認したが棺材の組み合わせ方を特定するには至らなかった。棺は長軸1.1m、短軸0.5mを測る。遺物は検出されていない。

埋葬施設 S X 166 (第186図) 木棺墓 S X 165の北に位置する南北に主軸をとる埋葬施設である。S D03により東辺を大きく削平されているが、位置や形状、埋土の状況から弥生時代の遺構と判断した。墓壙の平面形はやや不整形な長方形を呈し、規模は長軸1.1m、短軸0.5m以上、深さ0.05mを測る。断面形は素掘りである。遺存状況が悪く、棺の痕跡を確認することはできなかった。遺物は検出されていない。

埋葬施設 S X 167 (第186図) 木棺墓163の東に位置する南北に主軸をもつ埋葬施設である。当初は切り合い関係にある2基のピットと考えて掘削を行ったが、掘削を進めるうちに掘形が同一であることが明らかとなり、弥生時代の埋葬施設であると判断した。墓壙の平面は長方形を呈し、規模は長軸1.27m、短軸0.5m、深さ0.25mを測る。棺の痕跡を確認することはできず、木棺墓か土壙墓か判断できない。遺物は検出されなかった。

17-10号墓 17-8号墓の南に位置する。完周する S D77(北：幅1.9~2.2m・深さ0.6m、東：幅1.3m・深さ0.6m、南：幅1m・深さ0.6m、西：幅1.8m・深さ0.5m)により区画される方形周溝墓である。周溝の断面は逆台形を呈しており、墳丘基底を明瞭に削り出している。盛土は確認されず、埋葬施設も遺存していない。周溝墓の規模は基底部で、南北8.5m、東西9mを測る。北側周溝は外側に向かってやや広がっている。これは断面観察の結果、第187図上段左に示すように、周溝埋没以前に掘削が行われた結果と判断した。この周溝墓の盛土、あるいは北西に位置する17-9号墓の盛土を確保するために、周溝が埋没する以前の段階でこの部分の再掘削作業がなされているものと判断する。また、周溝南西隅部分では隣接する17-14号墓の周溝により、この周溝底面がえぐり取られている状況が観察された。西側周溝は他の部分に比して幅広いが、これは、17-14号墓造墓時に盛土確保のために再掘削がなされたためと判断する。したがって、17-10号墓は17-14号墓に先行して造墓されたと考える。東に隣接する17-11号墓や南に隣接する17-13・12号墓との前後関係は明らかではないが、この周溝墓を中心に計画的に小規模な周溝墓が配置されているようであり、この周溝墓が先行する可能性が高い。

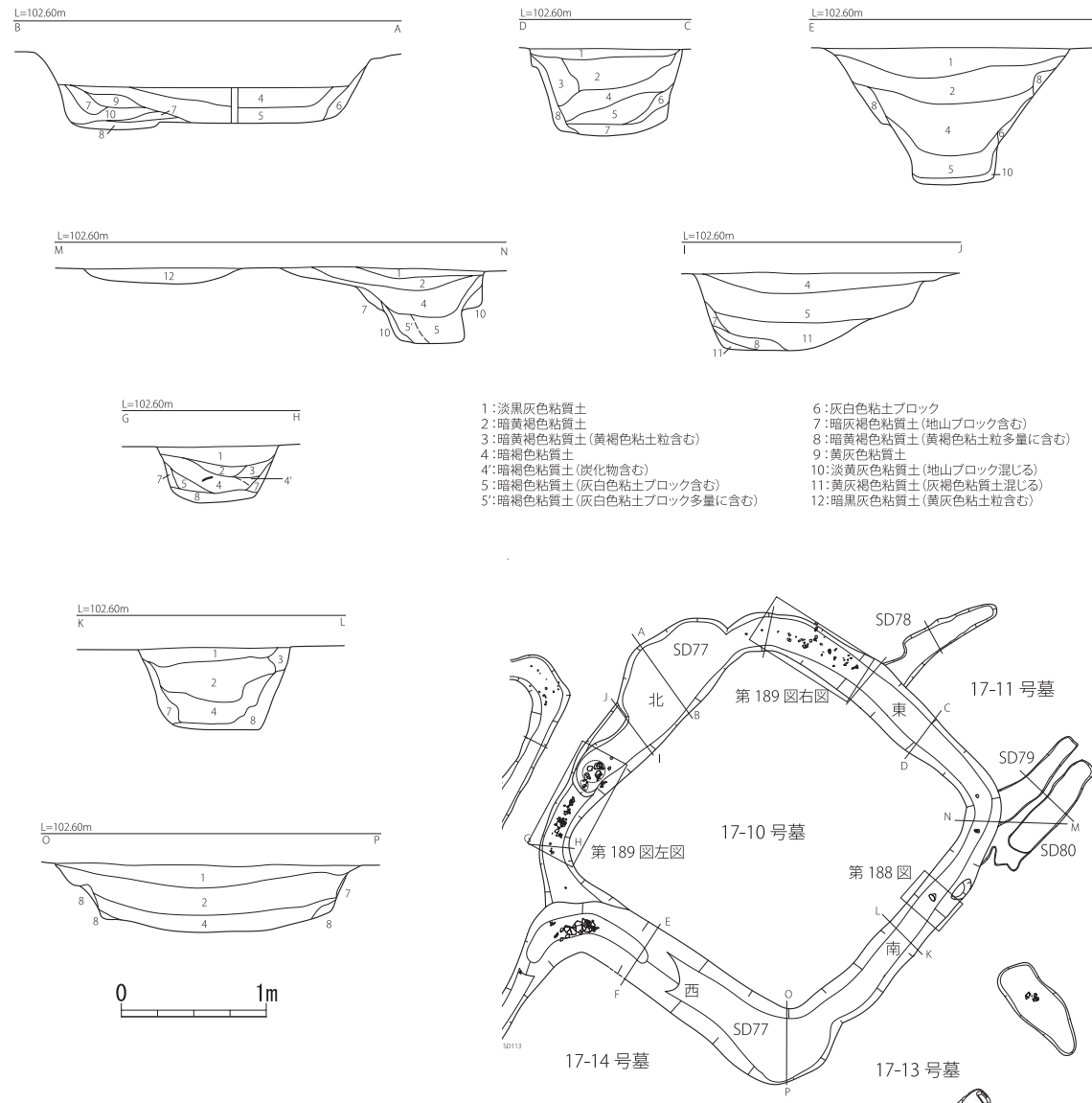
周溝各所から弥生土器が検出された。南側周溝中央の底部付近では壺底部(第200図39)が横位で検出された(第188図)。ほぼ床面近くから出土していることから、この周溝墓造墓後まもなく転落もしくは遺棄されたものと考えられる。また、埋土中からは石皿片(第202図58)が出土して

いる。

周溝の北西部では壺(第200図40・41)・甕(第200図42)が転落した状態で検出された(第189図左)。これらの土器群は、いずれも第187図G－H断面に示す4層中から検出された。周溝が一定程度埋没してから遺棄された遺物群とみられる。また、周溝墓の墳丘肩からは破片となった砥石が検出された。この砥石は周溝墓の墳丘側からの転落あるいは遺棄と考えられ、葬送儀礼に石器が使用されている可能性を示唆するものである。

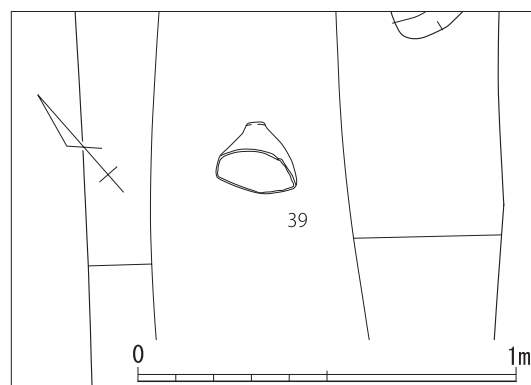
周溝北東部では、周溝検出面とほぼ同レベルで細片化した弥生土器が検出された(第189図右図)。壺や高杯(第200図43)などが存在する。いずれの小片も第187図C－D断面に示す1層中から出土しており、これらの土器群は周溝がほぼ埋没してからのものと判断される。この地区における墳墓としての利用の最終段階を示す土器の可能性が考えられる。

17－11号墓 17－10号墓の西に隣接する方形周溝墓である。東は17－10号墓のS D77を共有し、北はS D78(幅0.7m・深さ0.2m)で、南はS D79(幅0.6m・深さ0.07m)で区画される。東側

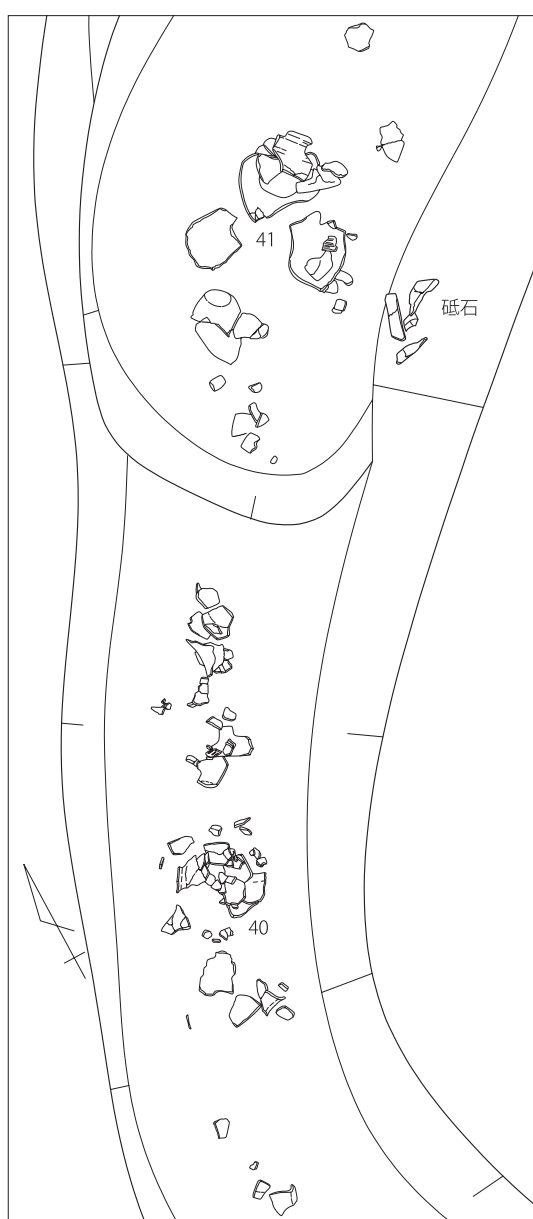


の区画溝は検出されなかったが、当初から存在しなかったのか、削平により失われたのかは明らかではない。盛土は確認できず、埋葬施設も検出できなかった。また、この墳墓に確実に伴う遺物もない。周溝墓の規模は東西4m程度、南北4.8mを測る。

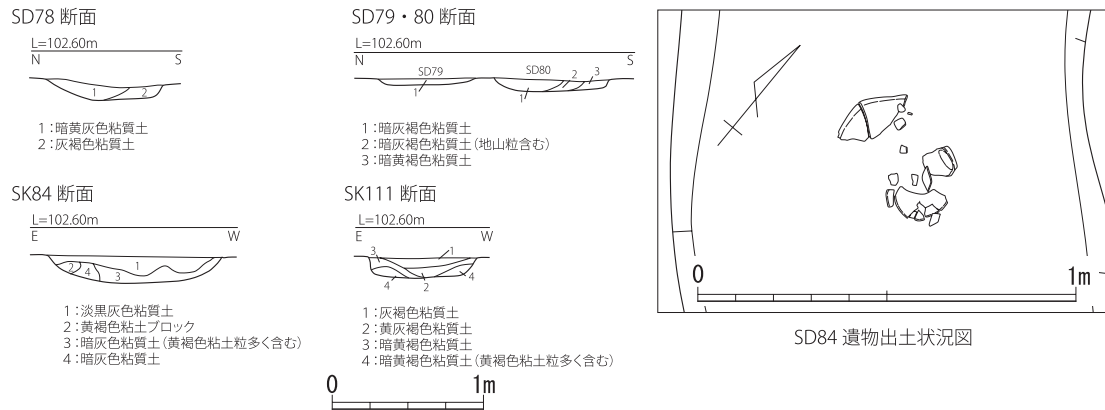
17-12号墓 17-11号墓の南に位置する。北はS D80(幅0.8m・深さ0.15m)、西は17-13号墓と共有する土坑状の溝S D84(幅1.2m・深



第188図 S D77遺物出土状況図(1)
(1/20)



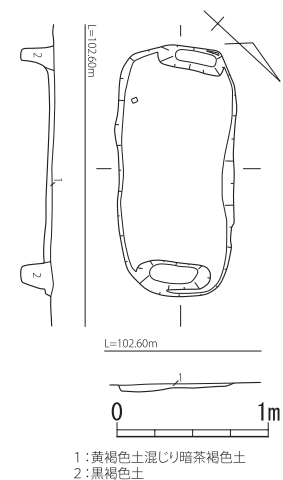
第189図 S D77遺物出土状況図(2)(1/20)



第190図 17-11～13号墓周溝断面図(1/50)、S D84遺物出土状況図(1/20)

さ0.2m)、南はS D84-2 (幅0.3m・深さ0.15m) で区画される方形周溝墓である。東側の区画溝は検出できなかったが、調査区外になっているものと判断される。周溝は完周せず四隅が途切れているものと判断される。盛土は確認できず、埋葬施設も検出できなかった。周溝墓の規模は東西5.6m以上、南北7.2mを測る。

土坑状の区画溝S D84のほぼ中央で壺底部を検出した(第190図右)が、17-11号墓に伴うものか、17-13号墓に伴うものか判断できなかった。



第191図 木棺墓S X 138実測図(1/50)

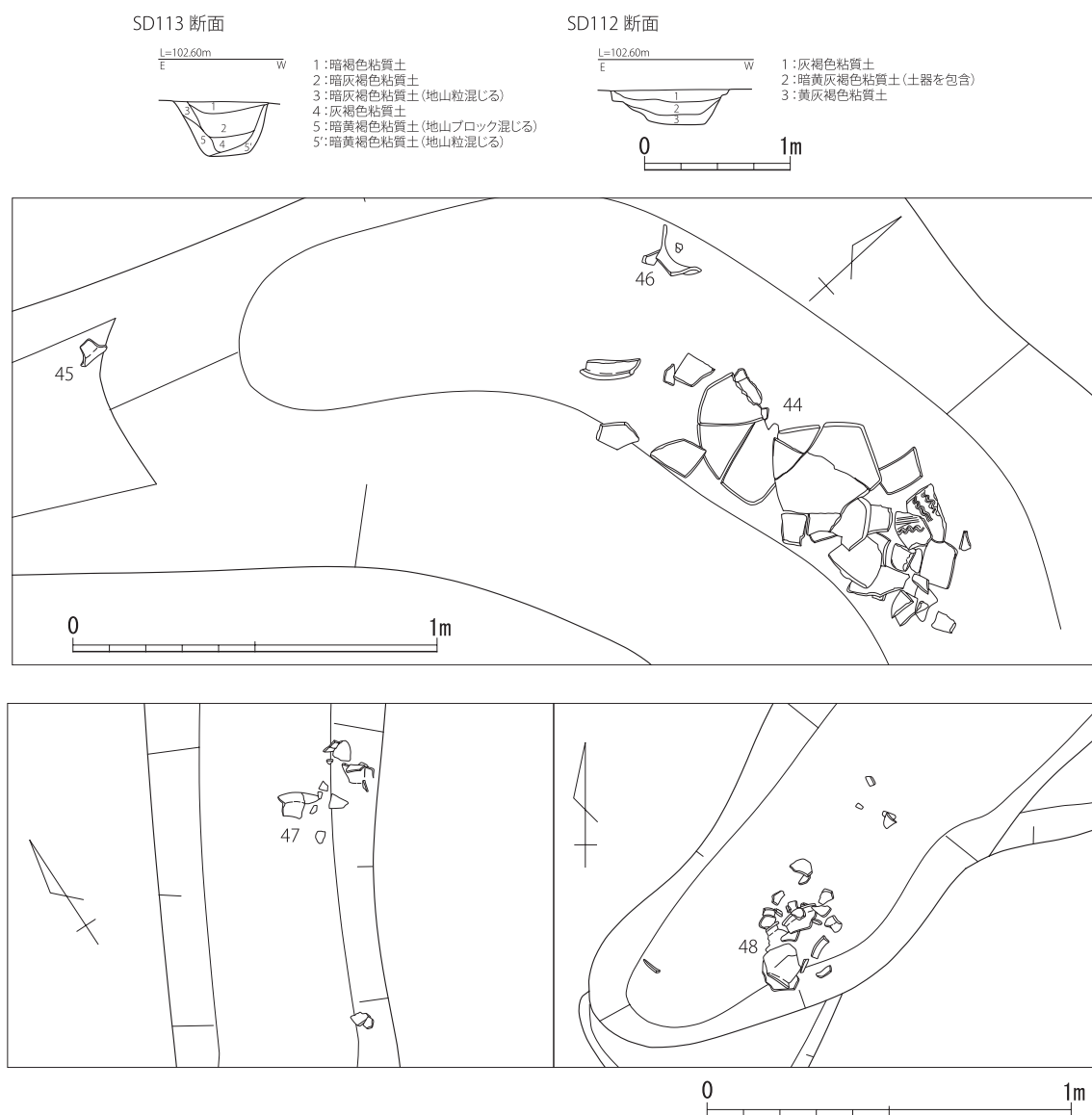
17-13号墓 17-12号墓の西に隣接する方形周溝墓である。北は17-10号墓のS D77で、東は17-12号墓の西側区画溝S D84を共有し、西は土坑状の溝S D111 (幅0.7m・深さ0.15m) で区画される方形周溝墓である。南側の区画施設については有無を明らかにできなかったが、埋葬施設が遺存していることから大きく削平を受けているとは考えられず、当初から存在しない可能性が高い。またS D111は、西に位置する17-14号墓の南側区画S D112を避けて掘削していることから、この周溝墓は17-10・14号墓に後出する方形周溝墓と考えられる。周溝墓の規模は東西7.8m、南北8m程度を測る。

木棺墓S X 138 (第191図) S D84とS D111のほぼ中間で東西方向に主軸をとる木棺墓S X 138を検出した。墓壙の平面形は両端が丸みを帯びた長方形を呈し、規模は長軸1.68m、短軸0.75m、深さ0.05mを測る。墓壙両小口部分には小口板を据え付けるための土坑が掘削されている。棺の痕跡は平面的には検出できなかったが、この小口穴の存在から小口板が棺底より突出する形態をとる箱型木棺が納められていたものと考えられる。なお、今回、区画墓で小口板が棺底より下に突出する形態の木棺を採用しているのは本例のみである。埋土中から弥生土器の小片が出土しているが、この埋葬施設に伴うものか判断できない。

17-14号墓 17-10号墓の南西、17-13号墓の西に位置する。「L」字状に屈曲するS D113 (西：幅0.6m・深さ0.4m、北：幅0.7m・深さ0.4m) を西および北の区画溝とし、東側は17-10号

墓のSD77を再掘削し、南側はSD112(幅0.8m・深さ0.25m)で区画する。南側が調査区外のため、全容は不明であるが、周溝の北東隅と南東隅は途切れる形態をとる。周溝墓の規模は東西8m、南北8mを測る。盛土や埋葬施設は検出されなかった。

周溝内の各所から遺物を検出している。SD77とSD113の接する地点はこの周溝墓に沿って深く掘り込まれており、この部分の底から大型壺(第201図44)の破片が検出された(第192図中)。破片数が少なく、完形個体が転落したとは考えがたい状況であるが、溝底面にほぼ接して検出されていることから、この周溝墓の築造時期を示す土器と考えられる。また、同地点では周溝埋土中から壺(第201図45・46)などが出土している。出土状況から、周溝が一定程度埋没してからこの地点に遺棄された遺物と考えられる。SD113北側中央では甕(第201図47)が墳丘側から転落した状態で検出されている(第192図左下)。これらの遺物は第192図2層中から検出され、溝底面から遊離しているため、周溝が一定程度埋没した後に、墳丘から転落した遺物の可能性が高いものと



第192図 17-14号墓周溝断面(1/50)、遺物出土状況図(1/20)

考える。南側のSD112からは溝南東部で周溝外から遺棄された状態で甕1個体(第201図48)が検出された(第192図右下)。周溝外から転落もしくは遺棄され、この場で崩壊したものと考えられる。

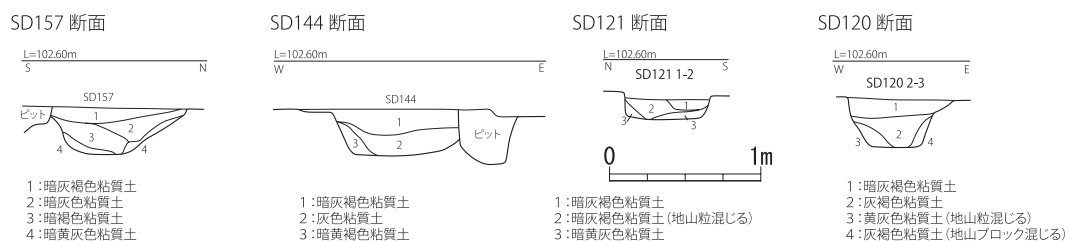
17-15号墓 17-4号墓の南西に位置する。東は17-4号墓のSD136、北は17-3号墓の南側区画溝SD145で、南は「L」字状に屈曲するSD157(幅0.5~1.2m・深さ0.3m)によって区画される方形周溝墓として認識した。西側は調査区外のため全容は不明である。盛土や埋葬施設は検出できなかった。周溝墓の規模は東西5m以上、南北6mを測る。墳丘の北東隅が不自然な角度をしているため、SD157は17-3号墓の拡張に伴うものの可能性も考慮しておきたい。この周溝墓に確実に伴う遺物は確認されていない。

17-16号墓 17-15号墓の南に位置する。「コ」字状を呈するSD144(北:幅1m・深さ0.3m、東:幅1.1m・深さ0.3m、南:幅1.1m・深さ0.3m)により区画される方形周溝墓である。なお、墳丘内北側で検出した東西方向のSD156(幅0.7m・深さ0.3m)は平面的な観察からSD144により切られているものと判断した。このSD156は17-16号墓の拡張前の北側区画溝と考えられる。17-15号墓との前後関係は明らかにすることができなかった。周溝墓の規模は拡張前が南北6.4m、東西2m以上、拡張後の規模は南北7.6mを測る。盛土や埋葬施設は検出できなかった。周溝南東部で細片化した弥生土器が検出されているが、体部片のみであり図示するには至らなかった。

17-17号墓 17-16号墓の南に位置する。「コ」字状を呈するSD121(北:幅0.6m・深さ0.2m、東:幅0.6m・深さ0.2m、南:幅0.6m・深さ0.2m)と、西側で検出されたSD122(幅0.5m・深さ0.1m)により区画される方形周溝墓である。また、この周溝墓の外縁部に沿うSD120(幅0.6m・深さ0.3m)をこの周溝墓の拡張に伴うものとする。SD121とSD120の間はSD03により削平され、土層などの観察によって拡張の確証を得ることはできなかったが、平面的な位置関係から、拡張を考えてよいものと判断した。SD121の北西隅は一段深く掘り込まれているが、平面形からみて溝内埋葬の可能性は低く、再掘削によるものとする。周溝墓の規模は拡張前が南北5m、東西5mを測り、拡張後南北7mを測る。盛土や埋葬施設は検出できなかった。

SD121西端で壺(第201図49)の大型破片を検出した(第194図左)。ほぼ溝底面に接しており、周溝墓の築造後まもなく埋没した遺物とする。また、SD120南端では細片化した壺(第201図51)・鉢(第201図50)を検出した(第194図右図)。溝底面より遊離しており周溝が一定埋没してからの遺物である。また、SD120の北側でも床面から遊離した弥生土器小片を複数検出している。

17-18号墓 17-17号墓の南に位置する。「L」字状に屈曲するSD114(幅0.9m、深さ0.2m)



第193図 17-15~17号墓周溝断面(1/50)

とS D119(幅0.8m、深さ0.2m)と、S D114の北に位置する土坑状の溝SD158(幅0.5m、深さ0.15m)により区画される方形周溝墓である。大部分が調査区外のため詳細は不明であるが、平面的な位置関係からS D158の延長上にあるS D122を17-17号墓と共有している可能性が高い。周溝墓の規模は東西1.6m以上、南北5.6m以上を測る。盛土や埋葬施設は検出できなかった。S D114北側で周溝外からの遺棄もしくは転落と思われる弥生土器小片を検出している(第195図)。

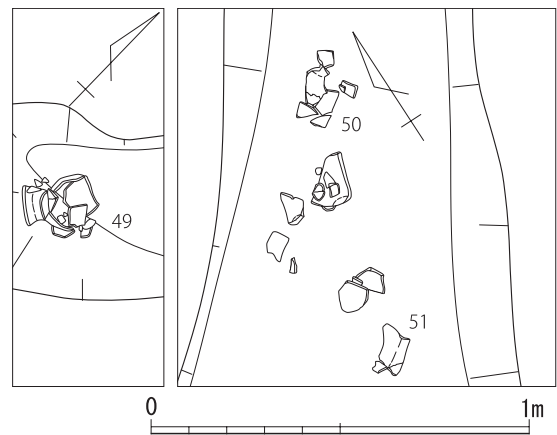
B. 出土遺物(第196～202図)

L5地区から出土した弥生時代の遺物として、弥生土器、石器を図示した。全て方形周溝墓の周溝および埋葬施設からの出土遺物である。以下、弥生土器については遺構ごとに概観し、石器についてはまとめて報告を行う。

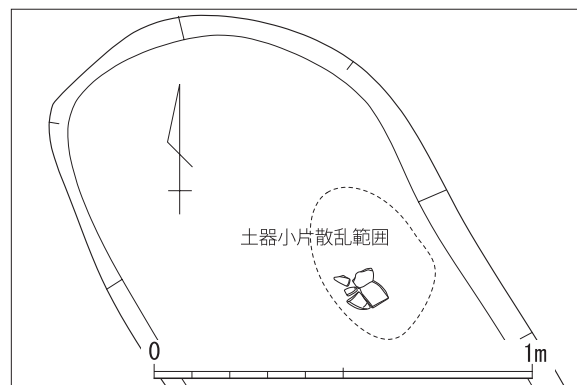
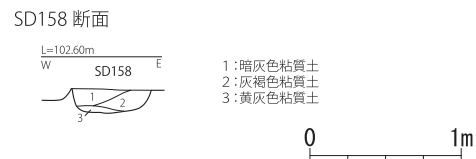
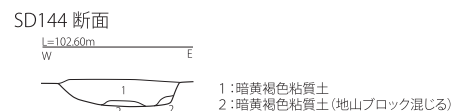
17-1号墓(第196図1～6) 1～3・6はS D02から、4・5はS D139から出土した。1は高杯である。浅い鉢状の杯部をもち、口縁を凹線文で加飾する。2・3は台付壺などの脚部の可能性がある。6は壺底部である。外面はタタキののちハケで調整する。4・5は甕である。「く」字状口縁をもち、口縁端部に刻目を施す。4はタタキの後、ハケで調整する。

17-2号墓(第196図7～9) いずれもS D133からの出土である。7は「く」字状口縁をもつ甕である。口縁端面に面を形成し、刻目を施す。外面はタタキ、内面はハケで調整する。口縁下端までタタキが及んでいる。8は無文の「く」字状口縁をもつ甕である。内外面ともハケにより調整する。9は壺の底部である。

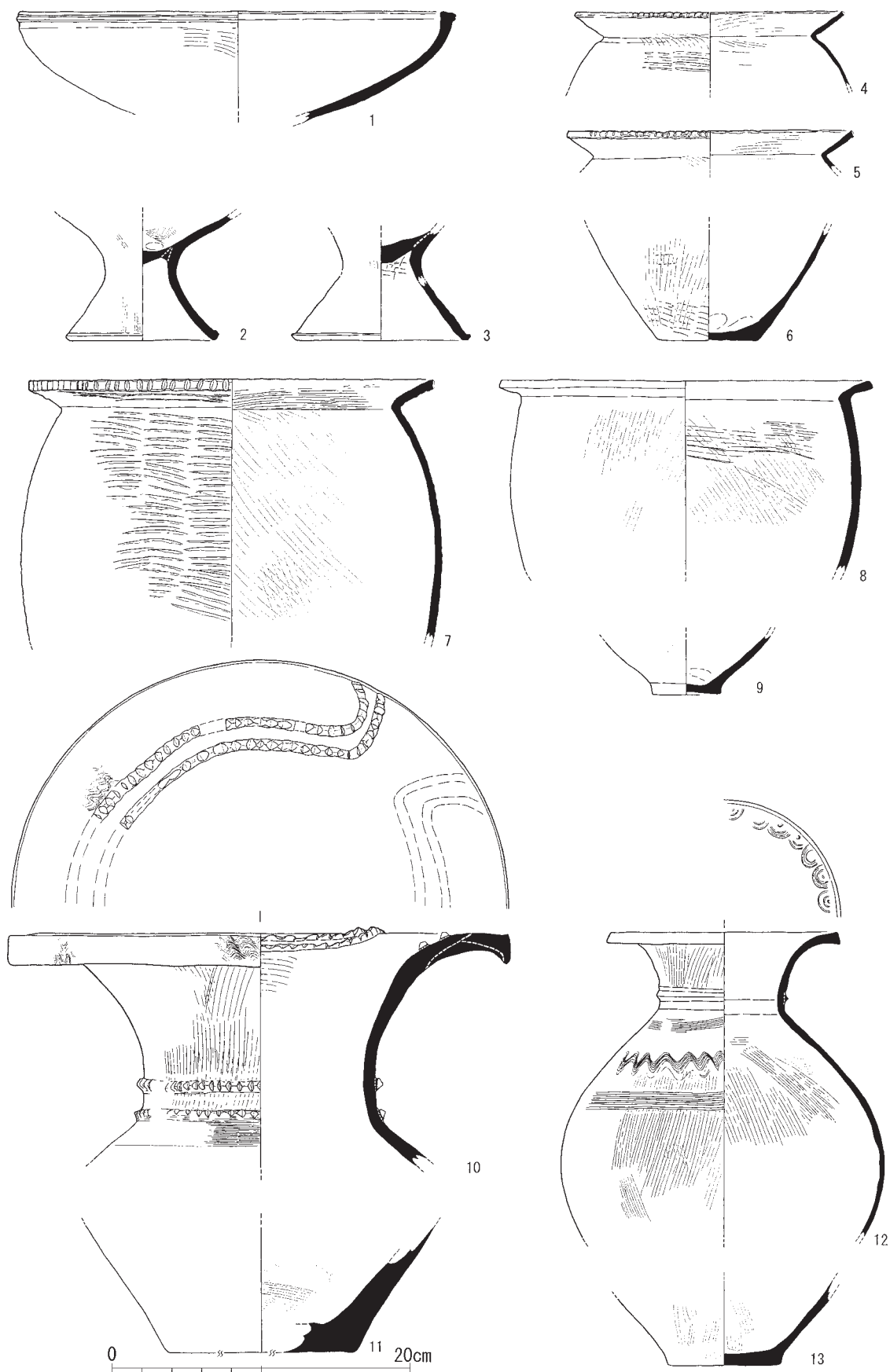
17-4号墓(第196図10～13、第197図14～22) 全てS D133からの出土であるが、10～15は17-5号墓側からの転落の可能性が高い。10は大型の加飾壺である。口縁内面および頸部に突帯による加飾を行う。播磨系の土器とみられる。11は10の底部になる可能性の高い個体である。12は広口壺である。口縁内面に扇形文を施す。頸部には1条の突帯をもち、体部上半は櫛描直線文と



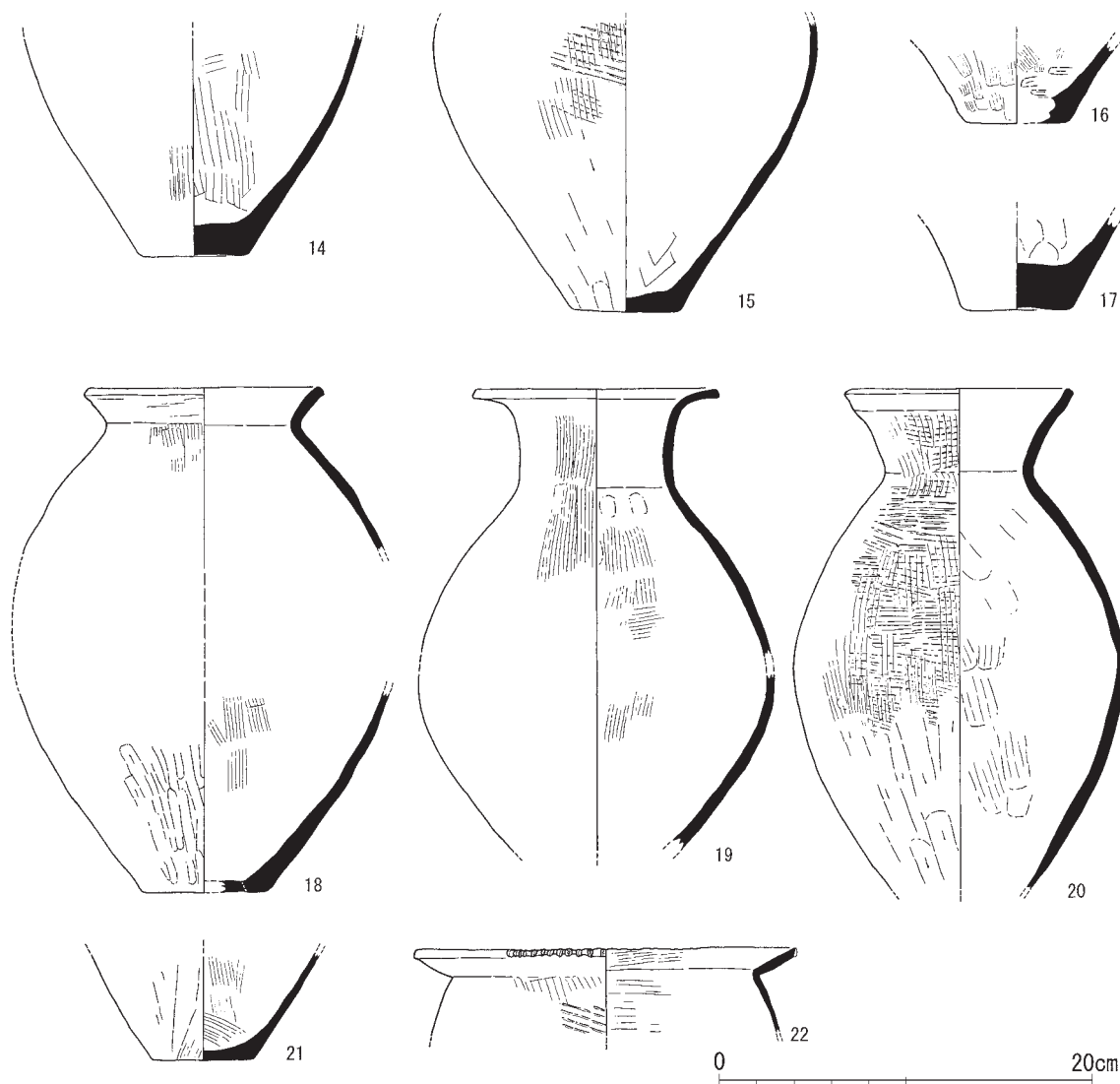
第194図 17-17号墓遺物出土状況図
(左: S D121、右: S D120) (1/20)



第195図 17-18号墓周溝土層断面(1/50)
遺物出土状況図(1/20)



第196図 L5地区出土遺物実測図(1)



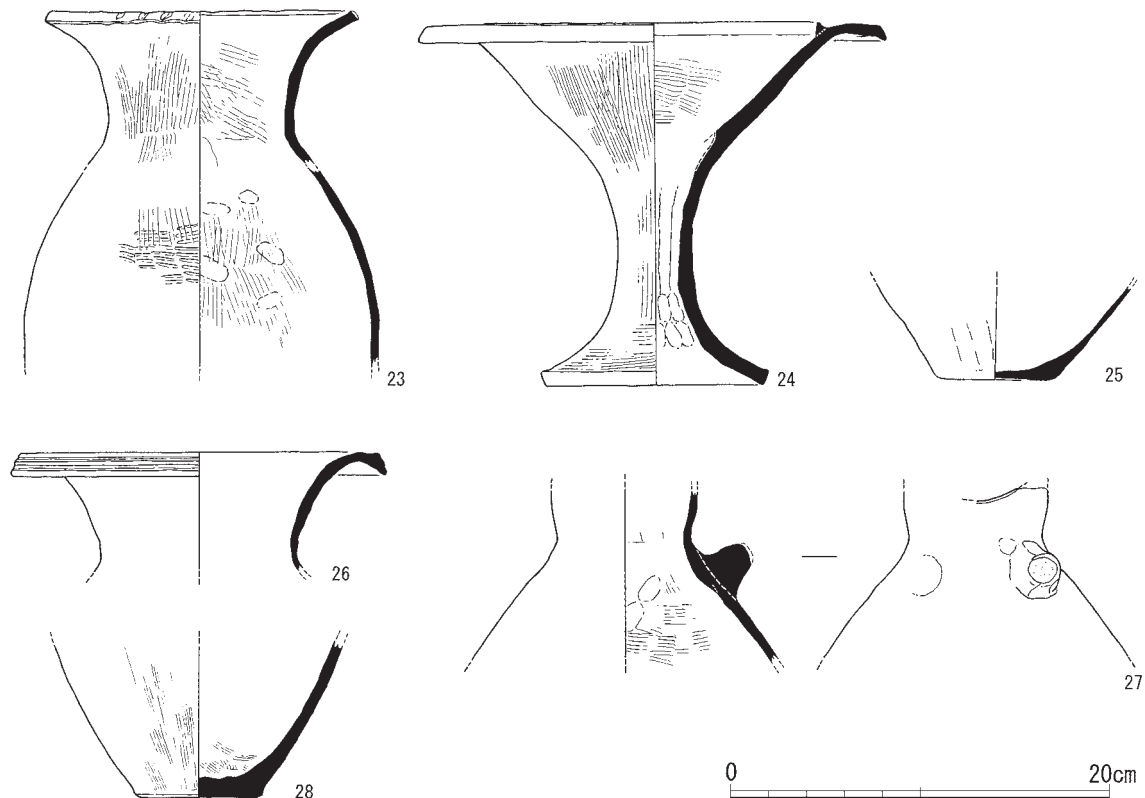
第197図 L5地区出土遺物実測図(2)

波状文で加飾する。内外面ともハケにより調整される。13は同一地点から出土した壺の底部である。14～17は壺の底部から体部である。18は短い口縁をもつ無文の広口壺である。体部上半はハケ、底部外面はケズリにより調整する。19は直線的に立ち上がる頸部をもつ無文の広口壺である。20は直口壺である。細長い体部をもち、短く直線的に立ち上がる口縁をもつ。外面はタタキのちハケを施し、最終的に底部外面からケズリ上げている。21は甕の底部。22は口縁端部に刻目を施す「く」字状口縁をもつ甕である。

17-5号墓(第198図23・24) 23はS D135Bから出土した広口壺である。口縁端面に刻目を施す。24はS D125Aから出土した水平口縁をもつ高杯である。

17-6号墓(第198図25) 25はS D126から出土した壺底部である。内外面とも器壁の剝離、劣化が著しい。

17-7号墓(第198図26～28) いずれもS D155からの出土遺物である。26は広口壺である。口縁端部を下方に拡張し、外側面に2条の凹線文を施す。27は水差し形土器である。短く直立す



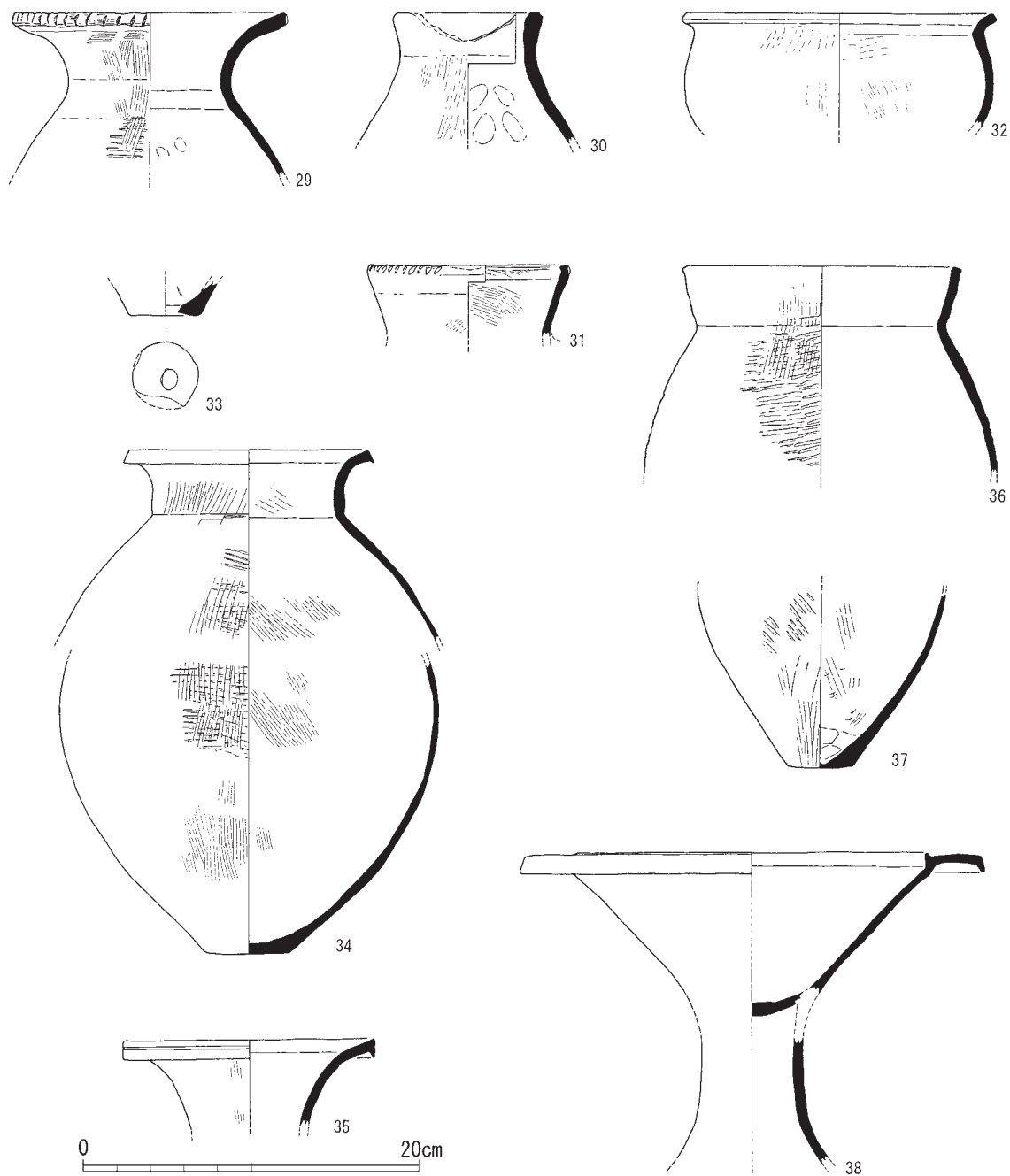
第198図 L5地区出土遺物実測図(3)

る口縁をもつ。剥離した把手部分の痕跡がみられ、口縁はこの方向に刳り込みをもつ。28は壺の底部と思われる。

17-8号墓(第199図29~33) 全てS D76からの出土遺物である。29は口縁に刻目をもつ広口壺である。30は水差し形土器と思われる口縁。31は口縁端面に刻目を施す直口壺であるが水差し形土器の可能性もある。32は短く外反する口縁をもつ鉢である。33は甕の底部である。焼成後穿孔がなされている。

17-9号墓(第199図34~38) 全て墳墓を区画するS K149からの出土遺物である。出土状況から短期間に投棄された一括性の高い土器群と考える。34は無文の広口壺である。短く直線的に立ち上がる頸部をもち、口縁端部は拡張し、面をなす。外面はタタキの後ハケで、内面はハケで調整する。35は広口壺である。口縁は下方に拡張し、1条の凹線文で加飾する。36は直口壺である。直線的に立ち上がる口縁をもつ。外面はタタキの後ハケで調整する。37は壺の底部と思われる。38は水平口縁をもつ高杯である。

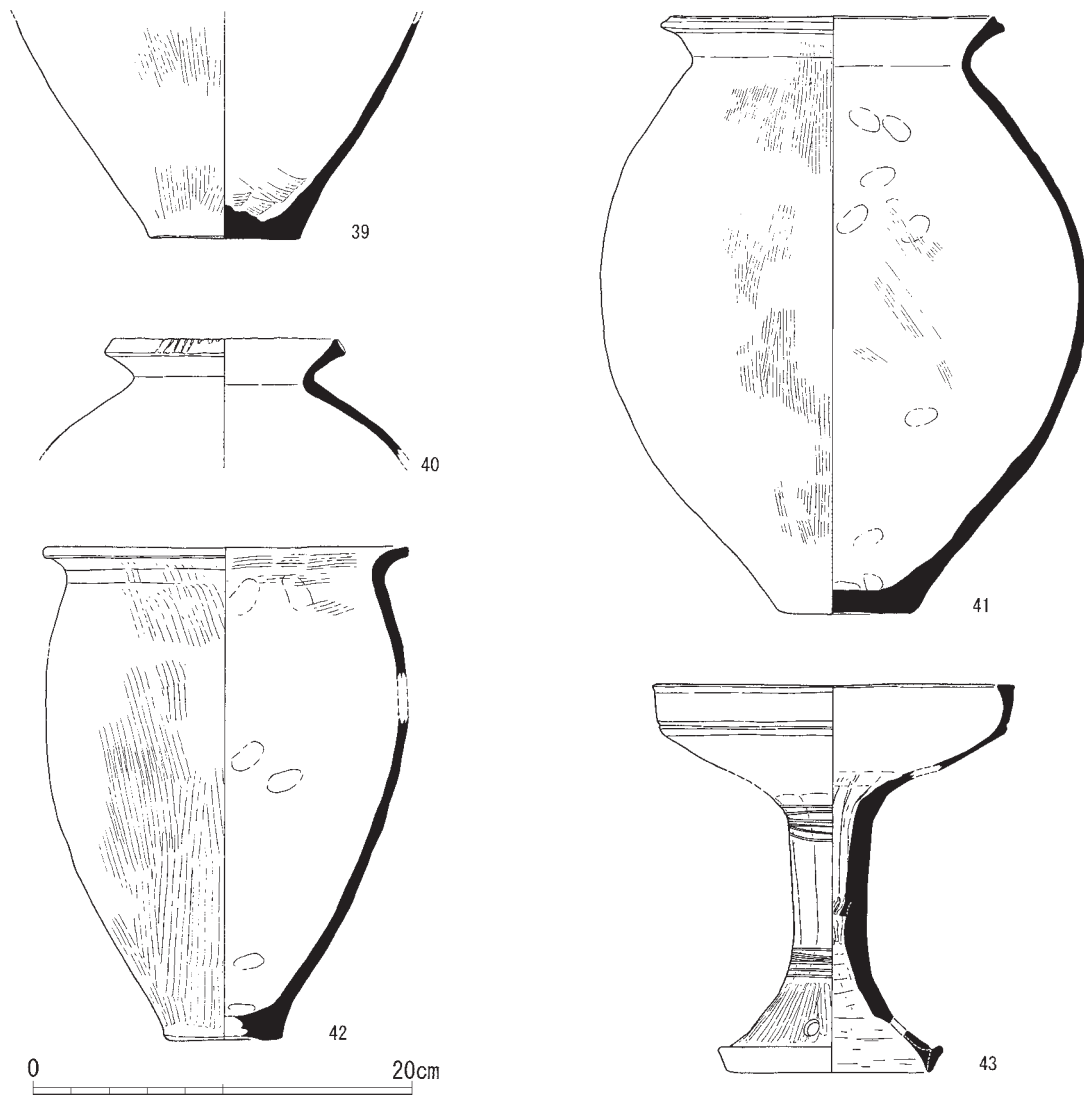
17-10号墓(第200図39~43) 全てS D77からの出土遺物である。このうち39が溝底面直上から出土しており、この墳墓の造墓時期にもっとも近い資料である。また、43は周溝の検出面から出土しており、最終的に周溝が埋没した段階を示す資料といえる。その他の土器は溝が一定埋没してからの資料である。39は壺の底部である。内外面ともハケにより調整される。40は短い口縁をもつ広口壺である。口縁端面はわずかに拡張し面をなす。41は無文の広口壺である。短く外反気味に立ち上がる口縁をもち、口縁端部は面を構成する。42は短く横にのびる口縁をもつ甕であ



第199図 L5地区出土遺物実測図(4)

る。43は高杯である。浅い椀状の杯部をもち、杯部下端を凹線文で加飾する。脚柱部外面には退化凹線文を施しており、脚端部は上方につまみ上げている。この地区の弥生土器の中でももっとも新しい様相を示す資料といえる。

17-14号墓(第201図44~48) 44~47はS D113、48はS D112からの出土遺物である。44は大型の加飾壺である。垂下する口縁をもつ。口縁は摩滅のため、刻み以外の加飾の有無は不明であるが胴部に櫛描波状文と直線文を施す。45・46は短い口縁をもつ壺である。45は刻みにより加飾する。47は口縁端部に刻目を施す「く」字状口縁をもつ甕である。48は口縁に刻目を施す「く」字状口縁をもつ甕である。体部上半に最大径をもつ。外面上半は摩滅のため調整が不明瞭である

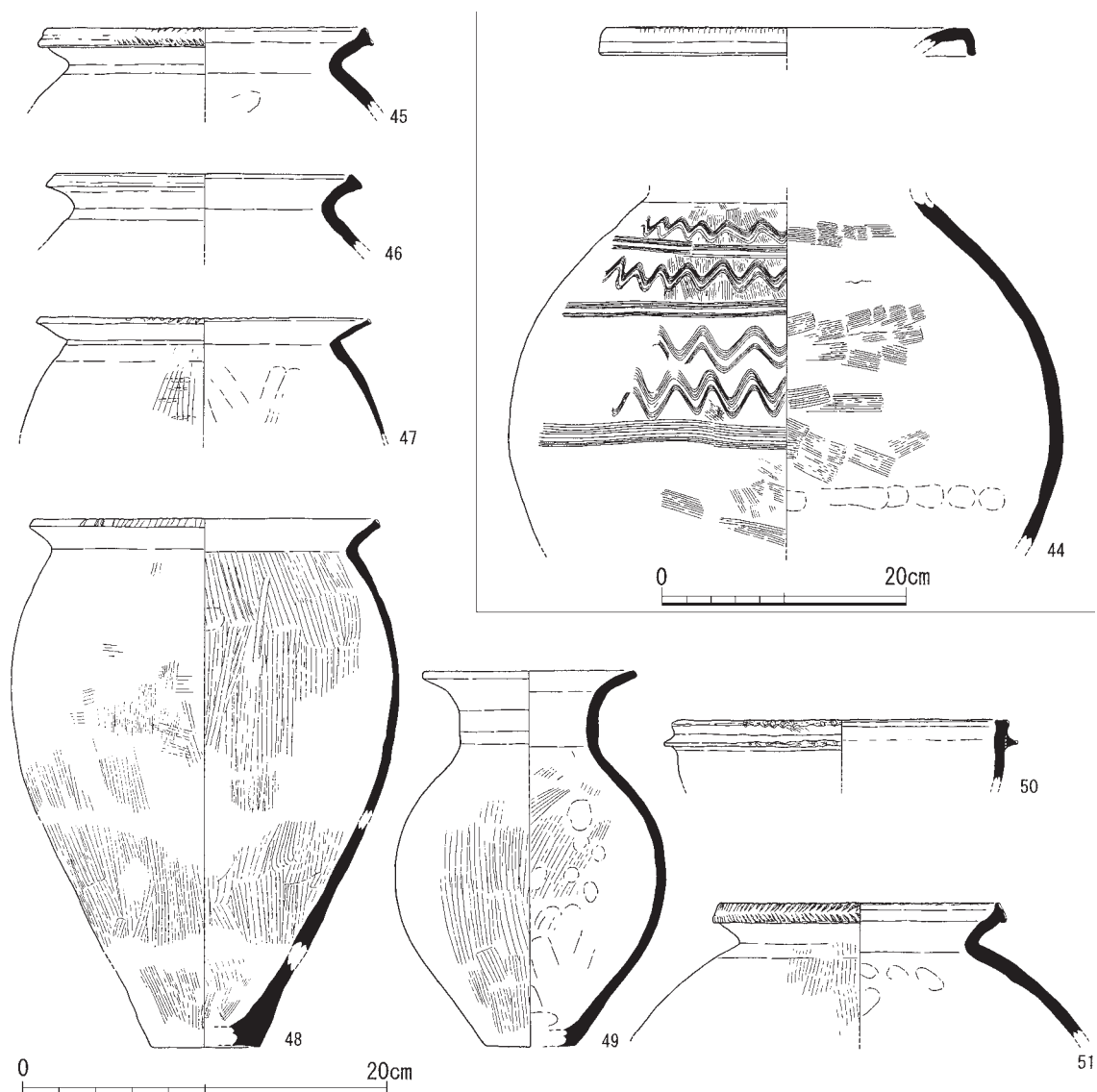


第200図 L5地区出土遺物実測図(5)

が、内面、および体部下半は縦方向のハケにより調整される。

17-17号墓(第201図49～51) 49はS D121から、50・51はS D120からそれぞれ出土している。この周溝墓は周溝の拡張を行っているものとみられ、49が拡張前の周溝墓に伴う遺物、50・51が拡張後の周溝に伴う遺物である。49は無文の広口壺である。直線的に立ち上がる頸部をもち、口縁端部は丸く収める。50は鉢である。1条の貼り付け突帯をもち口縁端面と突帯に刻目を施す。51は短い口縁をもつ広口壺である。刻目で加飾する。

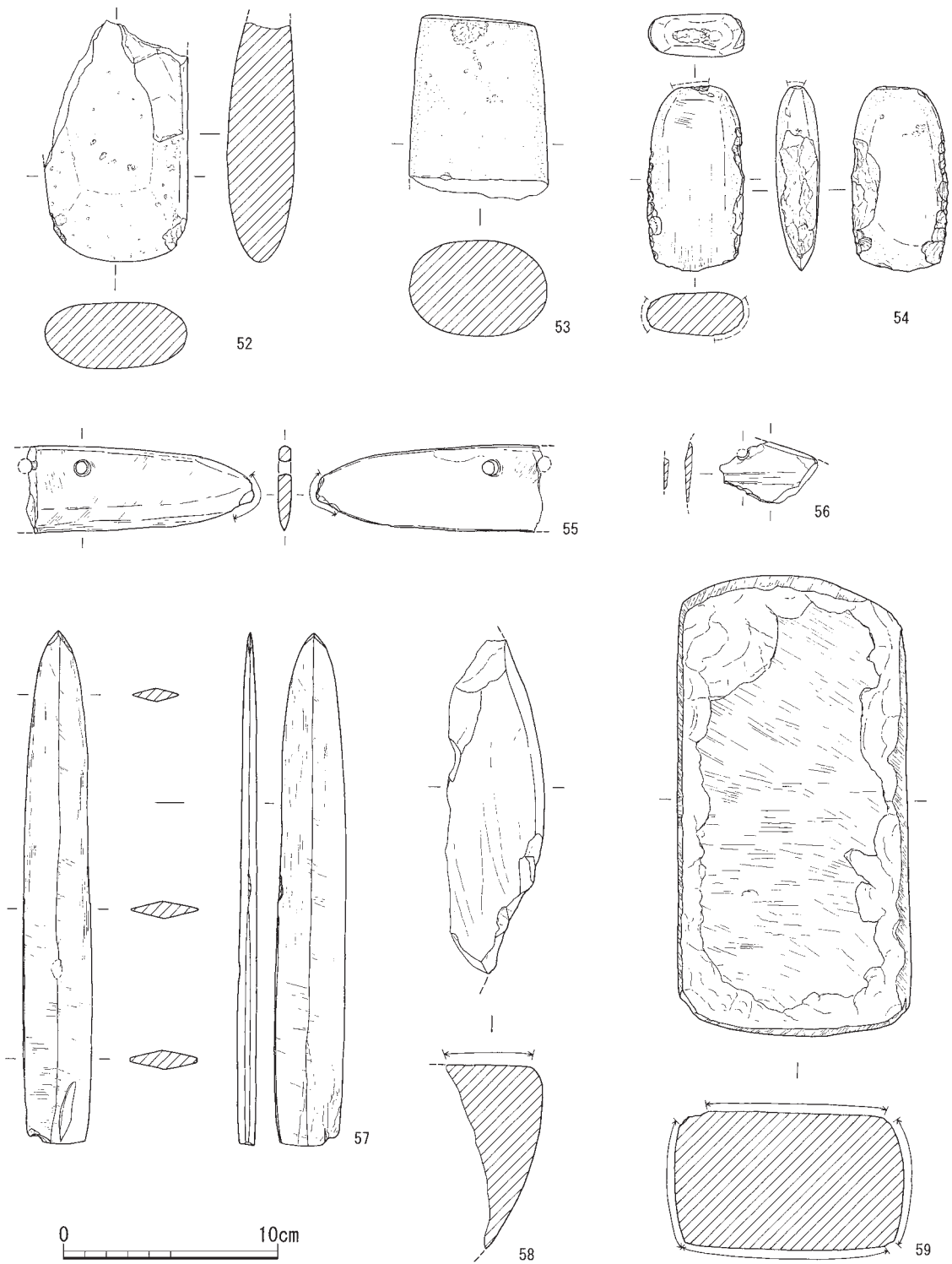
石器(第202図) 52は17-1号墓のS D02から出土した磨製石斧の刃部である。53は17-7号墓のS D125Bから出土した太型蛤刃石斧の基部である。基部によく見られる打痕が認められない。54は17-8号墓のS D76から出土した小型の磨製石斧である。55は54とともに出土した石庖丁である。刃部は両刃を形成し、水平に長い形態をとる。56は17-6号墓の木棺墓S X150棺内流入土から出土した石庖丁の細片である。円孔部付近の破片であり、刃部や裏面が剥離し、本来の形態は不明である。副葬遺物とは考えがたく、混入品であろう。57は17-4号墓のS D133か



第201図 L5地区出土遺物実測図(6)

ら出土した磨製石剣である。この墳墓に伴う遺物とみられる。ほぼ完形品であり、全長24cmを測る。刃部から基部まで錆をもつ。刃部は13cmを測り、研ぎ減りとみられる痕跡が確認される。また、基部の一部が変色しているが、石材の色の差か刀装具の痕跡か判断できない。58は17-10号墓のSD77から出土した石皿片である。59は17-6号墓のSD126Aから出土した砥石である。大型の直方体であり、6面全てに使用痕が認められる。

(石崎善久)



第202図 L5地区出土遺物実測図(7)

京都府遺跡調査報告集 第135冊

平成21年3月31日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社
〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141